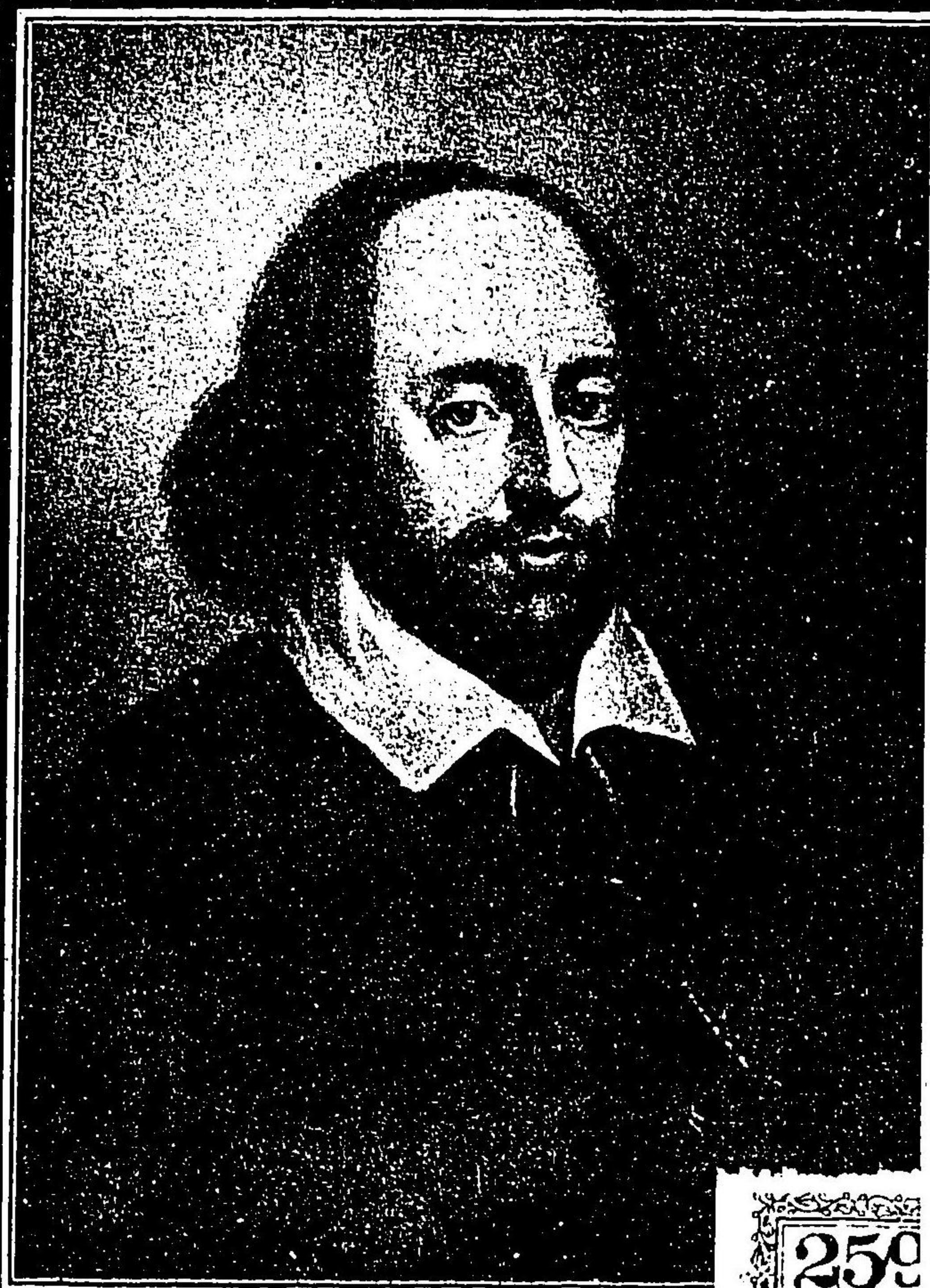
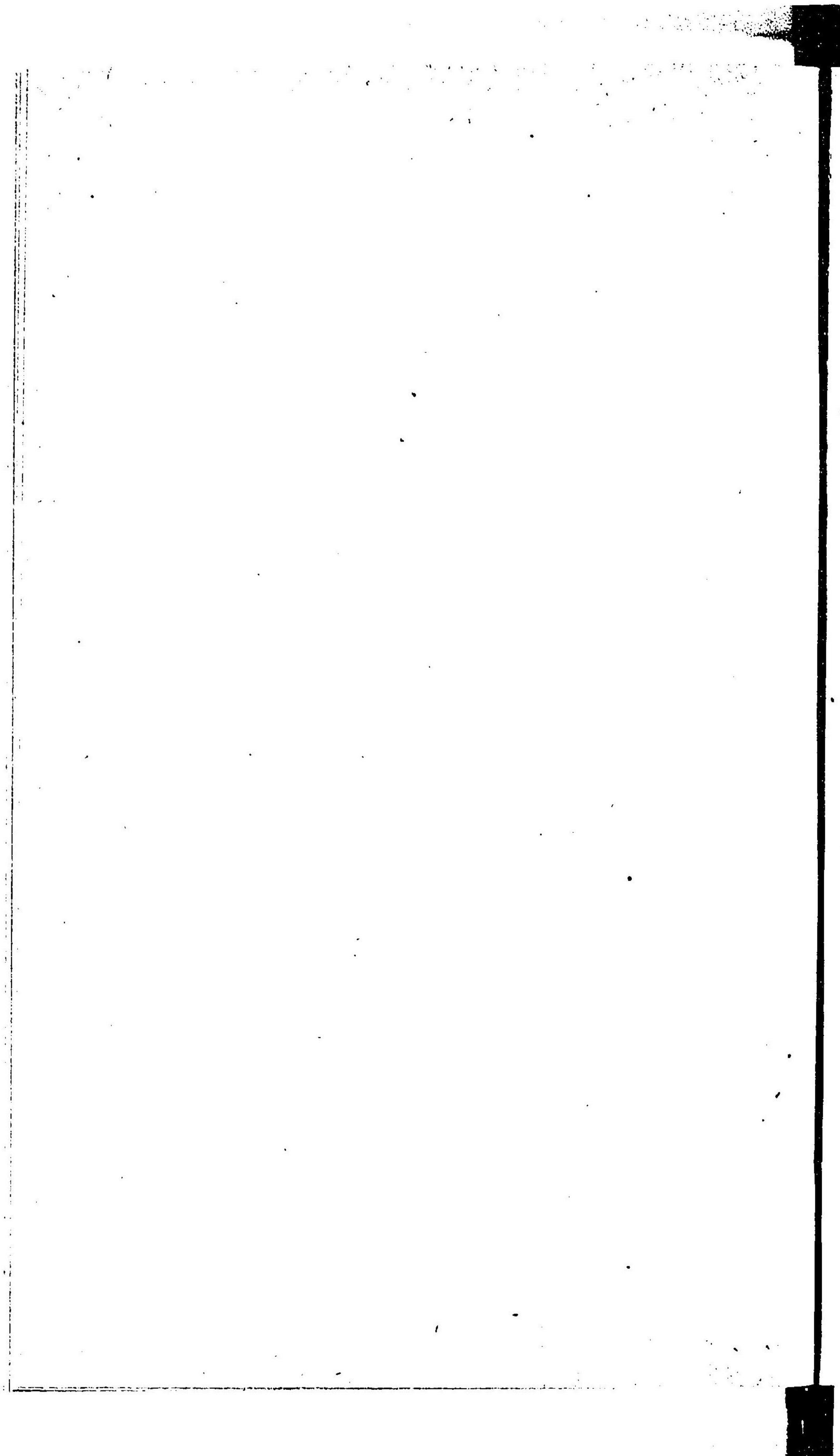


通 俗 文 庫 第 八 編

シエークスピア物語

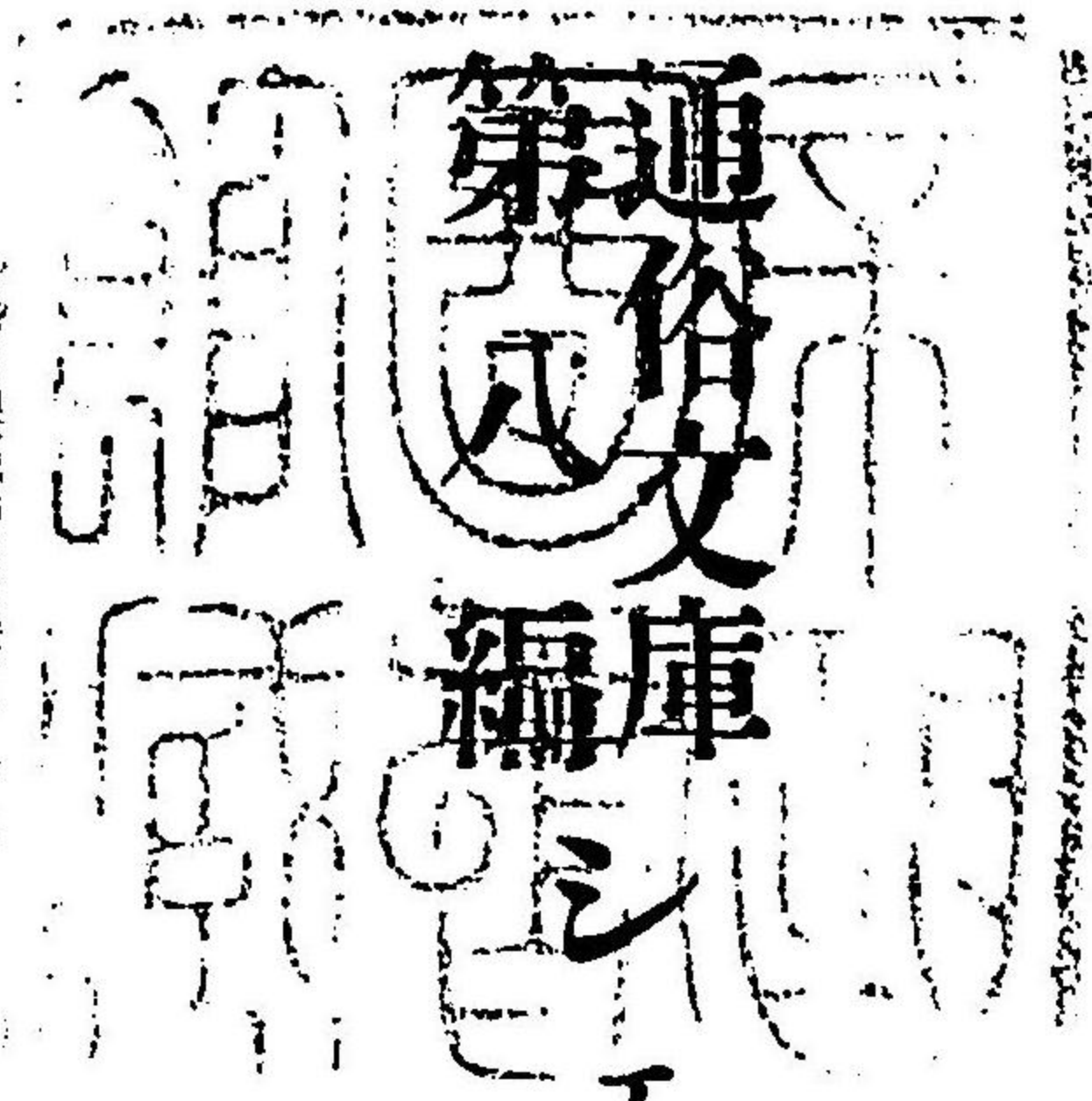


259
479



特22
176

百島 操譯述



一クスピア物語

東京 内外出版協會



序

現今の日本に於て、書籍を平常握るほどの人が、シェイクスピアの名を知らぬ者はなからう。然しシェイクスピアといへば「ハムレット」や「オセロ」とばかり思つて居る人のあるところを見ると、その名前の擴まつてる割合に、内容は餘り知られて居ないといふことになる。けれど如何なる國民にせよ、シェイクスピアを知らないのは耻辱ではなからうか。それでこの通俗文庫にもその二三を紹介することにした。勿論本書はラムの「シェイクスピア物語」に據つて居る。また内容は健全なる家庭に入れて可いやうなものを選んだことは言ふまでもないことだ。

明治四十二年七月

百島操

同じ著者に依つて編著されたる書

第一編 天路歷程

第二編 奴隸トム

第三編 聖書物語

第四編 赤靴物語

第五編 二人巡禮

第六編 ソロモン漂流記

第七編 イソップ物語

トルストイ短篇集

トルストイ小説集

ワシントン言行録

ゴッルドン言行録

通俗文庫

目次

一 暴風雨物語……………一頁

二 御意の儘物語……………三一

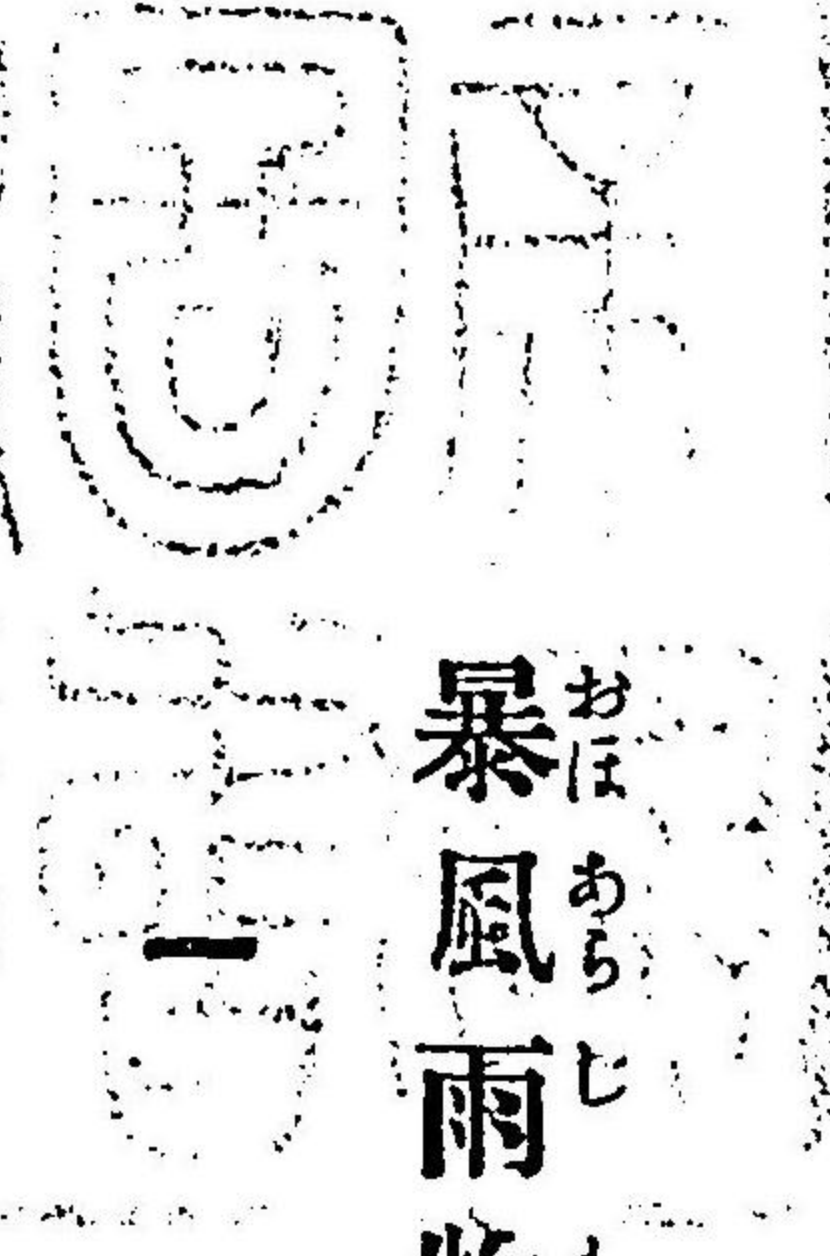
三 冬物語……………六五

以上

目次

通俗文庫 第八編 シェークスピア物語

暴風雨物語



曾てある離れ小島が、沖に唯一つぼつちりあつた。此の島にはプロスベ
ロといふ老人が、それはく美しい唯一人の娘ミランダと兩人で住ん
てゐた。この娘ミランダは極小さい時分に、この島へやつて來たので、今
までに、まだ自分の父親の外、人間の顔といふものを見たことがないの
だ。

兩人はこの島のある巖窟に住んでゐたが、この巖窟は種々の室に分れ
て居て、その中には勉強室もあつた。この室にプロスベロは澤山の書籍、

殊に魔術に關する書籍を備へつけて置いた。この魔術に關する學問は當時の學者が非常に研究して居るところで、プロスベロも亦この智識がなくてはならぬと思つて、同じく研究をして居たのである。兩人は妙な機會でこの離れ小島に流されたのであるが、元來この島は魔法使婦シコラックスの支配の下にあつたのだけけれど、プロスベロ親子がこの島へ來る少し以前シコラックスは早死んでゐた。

プロスベロは流石魔術の達人であるから、この島へ來ると直ぐ自分の力でシコラックスに背いて大きな樹の洞穴に押込められて居た多くの性質の良い妖精を解放してやつた。それで此等の従順しい妖精はプロスベロの恩誼に感じて、其後といふものは、何も彼も彼の命令をよくきいてゐた。この妖精の中でアリエルといふがまづ首領株であつた。この活潑な妖精アリエルは少しも悪氣のある奴でない。たゞ以前シコラックスに苛遇められたから、その意趣返しのためで、その子のカリ

パンといふ醜い怪物を苛遇めて悦んで居たまでの事である。このカリパンといふ奴はプロスベロが森の中で發見したので、人間よりは寧ろ猿に近い不恰好の奴だ。プロスベロは彼奴を自分の巖窟に連れて來て、話しする事を教へ、また非常に深切に待遇してやつた。けれども彼奴は性惡の母様シコラックスの血を受けてか、些少も善い事を覺えようとしない。それでプロスベロも遂に彼奴を全く奴隸の如く取扱ひ薪を運ばせたり、種々骨折仕事をやらせ、妖精の首領アリエルに命じて彼奴の監督をさせた。

だから若しカリパンが怠けたり、仕事を忽諸せにすると、アリエルはプロスベロの外誰の眼にも見えないから、内密カリパンを捻つたり、泥の中へ蹶倒したり、口をゆがめてやつたり、また自分を蠅の形に變へて、カリパンの通る途に轉がつて居て、跳足でふませたりして、彼奴を苛遇めてゐた。

プロスペロは此な有力な妖精を自分の思ふ儘にしたので、一同を利用して、風や波を思ふ儘に起さすことが出来た。それである日プロスペロは此等の妖精を使つてそれはく激しい大暴風を起させた。浪は逆巻き、何でも一呑に呑むて了ひさうに見える。この時父プロスペロは娘のミランダに向ひ、沖の方に波にもまれて居る一艘の船を指しながら、あの船には我々と同じやうに生きて居る人間が一杯乗つて居る事を話した。

すると娘は、

「お父様貴方が此なに大暴風を起しなされたのなら、あの可哀さうな人々を何うか助けてやつて下さい。御覽なさいあの船はあれく散々の目に會つて居るではありませんか、眞實に可哀さうです。あの方々にいまに死んで了ひませう。私若しそんな力を持つて居ようものなら、この海を地面の下へ埋めて了ひ、あの船に乗つて居る貴い生命を救つてあげますかな。」

「ミランダ、何もそんなに心配するには及ばない。自分はその乗組員には少しも害を興へてはならぬと命令けて置いた。だから心配など無用だ。……實は此な事をするのも悉皆お前を可愛いと思へばからだ。お前は自分は何で、また何處から来たのか知つて居るか。お前は多分私はお前の親で、あんな巖窟に棲むてる位の外何も判明するまい。……お前以前の事を知つて居るか。……お前は三歳の時此處に來たのだから、大方何一つ覚えて居なからうが。」

「けれど確と覚えて居るやうです。」

「何、それではお前の覚えてるといふ事を云うて見るが可い。家の事人の事、何でも可い。」

「何ですか夢のやうですけれど、四五人の女中が私に附いて居たやう

に覺えて居ます。』

『その通りだ、それ以上の女中がお前には附いて居たのだ、それが何うしてお前の心中に残つて居るのだらう……ではお前は何うして此の島へ來たのかそれを知つてゐるか。』

『否、最う他には何も覺えがありません。』

『丁度今から十二年以前だ、自分はミランの領主で、お前は公爵のお姫様、眞實に自分の唯一人の後継娘であつた處が自分にはアントニオといふ弟がある。元來自分は人中に出るのが厭で、それに物靜かに勉強がしたいから、政治の事は一切弟に任して置いた。抑もこの起りは此事で、自分がこんな破滅に陥つたのも此れが原因だ。自分は總ての世の慾望から逃れ、讀書に耽り、精神を修養しようとして萬事を犠牲にした。それを弟のアントニオの奴善い事にして、實權を握り、自分の領地を奪ひ取らうと考へ、我が強敵ネーブルス王の援助を仰ぐに至つたのだ。』

『え、まあ恐ろしいけれどその時私達を何故殺さなかつたのでせう。』

二

するとプロスペロは熱心に説き出した。

『さう思ふのも尤もだが、そこは人民が自分に非常に懐いて居たので、さう思ふが儘にも仕向けられず、致し方なしに、自分達を船に乗せ、沖の方五六哩の所で、破れかけの小船に強ひて移らせ、置去りにして、自分達を殺さうとしたのだ。けれどそこは我重臣ゴンザロが内密小船の中に、飲食物、衣類などと領地よりも大切な書物五六冊を入れて置いて呉れたので助かつたのだ。』

『ではお父様、私何なにお邪魔になりましたでせうね。』

『いや、お前は自分の失望を救うて呉れた天使だ。お前の罪のない顔を

見るのが何より樂みて、それで自分は不幸を耐へ忍ぶことが出来た。』
 『お父様何うも有難うございました。けれども何故今お父様は、こんな暴風雨をお起しなされたのですか。』

『では話さう……。この暴風雨のために、ネーブルス王と弟アントニオが此の島へ吹き流されるやうになつたのだ。』

斯ういつて、プロスペロは自分の携へてる魔術用の杖で娘を軽く打つと娘は直ぐ眠つて了つた。さうすると妖精のアリエルがプロスペロの前に顯はれて暴風雨を起したと、船の乗組員を始末したことなどを逐一始終話した。勿論こんな妖精はミランダの眼には見えないけれど、プロスペロがたゞ妖精と話するとき獨言を言つてるのが工合が悪いと見えて娘を眠らせたのであつた。

プロスペロはアリエルに向ひ、
 『それはよかつた。それはなかく巧くやつた。』

といふと、アリエルは一層調子づいて暴風雨のこと、水夫等の危険に會つたこと、ネーブルス皇子ファエーディナンドが真先に海中に飛込んだこと、それで父なる王は我が最愛の息子は浪に漂はされ早溺れて死んで了つたものだと考へたことなどを精細しく話した。

そして言葉をついで、
 『けれど皇子は安全です。死んだ筈の皇子はこの小島の隅へ無事に着きました。そして自分の父様はあの暴風雨で死んで了つたに違ひないと頭を垂れながら腕組をして考へたのです。けれど死んだと思つた父様もまた無難で、頭髪の毛一本も損じませんのです。たゞその立派な衣類が海の水にぬれたので、まるで濡れ鼠のやうになつたが、それが却つて以前より新しくなつた位に見えました。』

『それはよかつた、その男を此處に直ぐ携れて來るが可い、自分が娘をその皇子に會はしてやりたいのだ。一體王は何處に居る、それに弟は？』

するとアリエルは得意氣に、

『何フアーディナンドを探させるために二人は残いて來ましたが二人の方ではフアーディナンドは既に死んで了うたものと諦めて探す氣にもならないのです。また乗組員全體は誰一人として死んだ者はありません。悉皆助かつたのですが各自は自分の外は誰も助かつた者はないと考へて居るのです。あの船も人々の眼には見えませんけれど安全に港に着いたのでムいます。』

『アリエル、お前は眞實に能く働いて呉れたけれど尙俺は爲て貰ひたいことがあるのだ。』

『もつと仕事があるのでムいますか——貴方はこの仕事さへ濟めば私を自由の身にしてやると仰しやつたのをお忘れになつたのではムいせんか。何うか私が一生懸命に務めを勵みましたことや、何も彼もかくし事を致しませんでしたことなど、何卒御忘れ下さいませんやう

にお願い致します。』

『何だつて？以前俺がお前の苦しかつた時助けてやつた事を忘れたのかね、お前は老耄の吝嗇のシコラツクの妖婆のことを忘れたのかね、一體あの妖婆は何處で生れたのだね。』

『アルジールスで生れたのでムいます。』

『然うかね……そしてその時分お前は何であつたか、一つ考へて貰ひたいものだ……そしてその妖婆誠に聞くに堪へないやうな魔術を行らかすのでアルジールスから追拂はれて、この島に水夫等の爲めに置き去りにされたのだ……それでだお前は妖婆の悪い命令を性分から聽くことをしないのを、妖婆が怒つて木の洞穴に閉込めて了つたのだ。それを私が見つけて泣いてるお前を助けてやつたやうな理ではないか、まさかそれをお前は忘れてはしまいがな。』

『それを忘れて何とも御詫びの爲ようがありません……何でも貴方

の仰せなら従ひますから。』

とアリエルは愧かしさうに言つた。するとプロスペロは、

『では命令をさくかな何に今度俺の用を尙一つして呉れたら、その時こそお前を自由の身にしてやる。』

といつて、尙爲すべき事柄をアリエルに命令けた。そこでアリエルはフアイディナンドを置いて来た場所へ行つて見ると、フアイディナンドはさも悲しさを様子で、草原に腰を下して居た。

アリエルはフアイディナンドを一眼見ると、

『貴方私と一緒に彼方に來てなさいませんか。ミランダ姫が貴方にも目にかゝりたいと仰しやつて居ります。さあ私に従いておいでなさい。』と言つて、斯な歌を歌ひはじめた。

『汝が父は早千尋の水底

その骨は珊瑚とかはり

眼は化して眞珠と光る。

潮にも朽ちず腐らず

くすしくも變る汝が父の死骸

きけ海姫の弔の鐘

時ごとにジンドンと鳴る。』

見失つた父に關して、此な不思議な知らせの歌を聞いたので、皇子は最う仕方がないと思ひ、失望してゐる氣を取りなほして、アリエルの後に従いて彼方へと歩いて行つた。

三

フアイディナンドはアリエルに伴はれて、プロスペロとミランダの兩

人が大樹の蔭に坐つて居る處まで来た。その頃ミランダは尙父様の外男
の姿といふものを見たことがないのだ。

フアーディナンドが此方へ来るのを見て父様は、

『ミランダ、お前彼方に見えるのは何だか判明るかね。』と訊ねた。

『父様、あれですか、あれは矢張妖精の一人でせう、大變綺麗な奴に見え
ますが、あれは妖精でせう。』

『いや左様でない、あれは吾々と同様食べもすれば眠りもする、また感
覚も持つて居る。…あの船に乗つて来たもので、いろ／＼な憂目に會
つた爲め、少し顔糞れをして居るが、それでもなかく／＼の美男子だ。…
はぐれた連中を探して歩いて居るのだ。』

ミランダは男といへば皆自分の父の如く、ごつ／＼した顔の、白髪混り
の者と思つて居たのに、フアーディナンドの如き綺麗な男を見て、大變
に喜んだ。又フアーディナンドの方でも、此な離小島に、こんな可愛らし

い娘の居るのを見、また耳新しい音楽の聞えるのを聽いて、之は何か不
思議な事があるに違ひない、大方心を迷はす島に、我が身は漂はされて
居るのではないか、あのミランダはこの島の女神ではないかと思つて、
其な事を訊いて見た。するとミランダは自分はその様な女神ではない、唯
の處女である、と、おづ／＼しながら答へた。その時父なるプロスペロは
急に兩人の會話を差止めた。彼は兩人の男女が互に尊敬し合つて居る有
様を見て、心密かに喜び、あのフアーディナンドは自分の娘を一目見て
戀してるのだと知つたが、それが一時の出来心であつてはならぬ。それ
には一つ難題を持懸けて、その心を試して見るが一番と、嚴格なる態度
でもつて、お前は島の島へ間諜として來てるのではないかと訊ねた。そ
の上、

『俺に従いて來るが可い、俺はお前の頸と足を縛り附け、海水を飲ませ、
その上貝や乾根や橡の殻を食さしてやる。』

といふと、フリーデインンドは、

『そんなに強勢らしい敵なら兎角、…そんな事は眞平だ。』

といつて、劔を抜いた。その時プロスペロは魔術の杖を振つて、フリーデインンドの身動きの出来ないやうにして了つた。之を見たミランダは父に継り、

『父様は何故、そんな亂暴なことを爲さるんですか、何卒か許して上げて下さい、この方は私が二度目にお目にかゝつた男の方で、なかく氣質の良さうな人ではありませんか。』

『まあ黙つて居るが可い、その上尙辯ると叱るが可いか…何もそんなに欺騙の肩を持つには及ぶまい。お前は男といつたら、この男とカリバンしか見たことはない。それでこの男は氣質の良い奴と思つて居るが、何といふ馬鹿だ。この男もカリバンも、それは好男子に違ひないけれ

ど世の中には尙と好男子は幾何でも居る。』

父は斯う言つて娘の心の堅さを試して見た。すると娘は、

『私はこの方で十分です、そんな好い男を見たいとは尠しも思ひません。』

この時父プロスペロは皇子フリーデインンドに向ひ、

『さあ此方へ来るが可い、お前は俺に抵抗ふ力は尠しもないんだ。』

『え、逆も抵抗ふことは出来ません。』

と、フリーデインンドは答へたが、自分は今魔術で力を失つてゐる事を知らないから、何うしてあのプロスペロに服従せねばならぬやうになつたかを寧ろ驚愕して居た。それで彼はプロスペロに従つて洞穴の方へやつて来た。歩行しながら、彼はミランダを頻と眺め心の中に斯な事を思つた。

『まるで自分は夢の中にあるやうに、自分の思ふ様にならないけれど

自分がこの美しいミランダを、一日一度で可い牢屋の窓から眺められるならば、この老人の恐喝も何恐いとは思はない。』

その後プロスペロは永らくフアイディナンドを牢屋の中へ入れて置かなかつた。暫らくすると彼は牢屋からフアイディナンドを引摺り出し、それはくむつかしい仕事をやらせ始めた。

それで娘に命令けてその男を見張りさせたが、その實自分は書齋に引籠つた積りに見せかけて、兩人の様子を陰から見届けて居た。

その後プロスペロはフアイディナンドに命じて、重い材木を積み上げさせたけれどフアイディナンドは皇子だから、今迄こんな苦しい労働を爲たことがないので、終には全然死んで了ひさうになつた。之を見たまらなミランダは皇子に、

『そんな仕事をなさいますな、父様は今丁度書齋に這入つて居ますから、なに三時間位は大丈夫です……さあ暫らくの間御休憩なさるが可

いではありませんか。』

『いや、まあ此の仕事を爲をはるまでは休みますまいけれど仕事を爲をはつたらば、その時こそ休息むことゝ致しませう。』

とフアイディナンドは何うしてもミランダの言葉を承知かなかつた。

四

するとミランダは、

『では貴方が此處に坐つて御在てになる間に私が運ぶことに致しませう。』

といつたが、フアイディナンドは何うしてもミランダの言葉を承知しない、再仕事に従事つた。此な事でフアイディナンドの仕事は反つて邪魔げられて材木を運ぶに大變遅れた。

プロスペロはファデーナンドがミランダと何な愛情を交して居るか、その試験の積りて身を隠したのであるから、ミランダが思うて如く、書齋に這入つて本を讀んでるのでもなく、實は兩人の傍に坐つて見えない様に兩人の會話を聞いて居たのであつた。

その中にファデーナンドはミランダにその名前を聞くと娘は父親が言つてはならぬと仰しやつたと言譯して、自分の名前をファデーナンドに話した。

之を見てるプロスペロは娘が自分の魔術にかゝり、兩人が愛に陥つて自分の命令に反いたのを知つても、別に怒らなかつた。そしてファデーナンドの長い會話を微笑みながら聽いてゐた。するとファデーナンドは娘に私は貴女を他人より尙と愛すると言ひ出した。暫らくすると、ファデーナンドはまた娘に貴女の御器量は誰にも比較べられない程美しいと讚めた。之を聽くと、ミランダは、

『私は女の顔といつたら、誰も見たことがありませんが、尙男と申した所で私の父様と、お友達の貴方の外、存じません。他の方は何な容貌をして在らつしやいますか、少しも存じませんが、それでも私は貴方のほか誰も知り會ひになりたいとは思ひませぬければ、また私の大好きな貴方のほか顔が何うの斯うのと想像したくはありませぬ……けれども私貴方と餘り勝手な話をして、父様の命令に反き、何とも申譯けのないやうな氣が致します。』

これを聽いてプロスペロは微笑んだ。そして頭を垂れながら、

『それ——自分の思ひ通りに行くわ、自分の娘は聽てネーブルスの女皇になりつゝあるのだ』と思つた。

するとファデーナンドはまた優美しい聲で——皇子といふ者は斯な言葉を使ふものだ——ミランダに、自分はネーブルスの王の嫡子だから貴女は聽て女皇になるのだと話した。

「私何と嬉しいか不知りません、眞實に嬉し涙が出ます、まあ何うしたら可いでせう、私は心の底から申しますが、貴方さへ私と婚禮なさりたいと思召めせば、私貴方の妻になりませう。」

そこでフアーディナンドはミランダのこの言葉に感謝の意を表はさうとすると、父プロスペロが兩人の前に顯はれ、フアーディナンドを遮り、「何にも恐がるには及ばない、ミランダ私は今迄實は兩人の話を立ちぎしして居たのだ。お前達の話は尤もだ。それでフアーディナンド私はお前を随分激しく酷使つたが、是もお前の愛情をためすため、お前は今は試験に及第したのだから、娘をお前に進げよう。今お前は眞の愛情で買ふことの出来た賜物なる、この娘を連れて行くが可い。親から云ふのも可笑からうが、この娘はなか／＼自分の自慢娘だ……」

と兩人に話し、暫らく経つとまた自分は今爲なければならぬ仕事を持つて居る。それで其處へ行くから、後兩人で何なりと話して居るが可いと

言つて、行つて了つた。父なるプロスペロは出懸けると直ぐ妖精アリエルを召出した。アリエルは、御前へ出ると直ぐ自分がプロスペロの弟とネーブルスの王に對して爲た事を話した。アリエルは彼等が見ても聞いても悚然とするやうな不思議な恐い物を示し、その感覺を失はせてやつたことを話し、また彼等が諸方を徘徊ついで、食物なく空腹を感じた時、遽に立派な饗應を兩人の前に具へ、兩人が食べようとすると、自分は急に形を變へて鷲のやうなものになり、その馳走を取去り、兩人にプロスペロをその領地より逐ひ、若き娘諸共離れ小島へ流した残酷さを思はせ、そんな事をした報いに兩人共、今苦しむのだと話したことを復命した。

それで妖精は言葉をつぎ、するとネーブルス王と悪黨アントニオは、自分達の加へた悪い事を悔いたこと、その後悔は誠の心から出たこと、その兩人の状態を見ては、自分みたいな妖精でも、氣毒に思はずに居られ

なかつたことを告げた。

そこでプロスペロは妖精アリエルに、

『では兩人を此處に連れて來るが可い、妖精のお前さへ兩人のことを氣毒と思ふなら、況して同じ人間の私が何うして黙つて居られよう……氣毒だが一つ兩人を伴れて來て呉れ。』
と命令けた。

五

アリエルは直ぐネーブルス王とアントニオと老人のゴンザロを携れて歸つて來た。三人はアリエルの後に從いて來たが途中空中で奏でる美妙なる音樂を聽いて驚いた。このゴンザロは嘗て惡黨のアントニオがプロスペロを殺す積りで帆も帆檣も無い短艇に載せ沖合

に棄てた時、深切に書物と食物とを積み込んで呉れた男である。

悲みやら、恐れやらして三人は一時感覺を失つて自分達は今プロスペロの面前に居るのを知らなかつた。それでプロスペロは先づゴンザロを生命の親と呼んで、自分は昔の主人であることを話してきかせたので、傍に居る弟と王とはこれこそ嘗て自分達が害を加へんとしたことのある、あのプロスペロなるを知つて驚いた。

それでアントニオは涙を流し、いゝ懺悔し、兄に昔の罪の宥を請うた。するとネーブルス王も亦自分が現在の兄を黜けんと企てたアントニオを助けたことを非常に後悔して、これ亦プロスペロに謝罪した。それでプロスペロは兩人の罪を許してやると、兩人はプロスペロの領地を返上しようとした。

するとプロスペロも亦ネーブルス王に、

『私も貴方に上げたいと取つて置いたものがあります。』

と言ひ出した斯う言つてプロスペロは傍の戸を開けると中から顯はれたはファードナンドと娘のミランダで、兩人は今將基をして居る所だ。

之を見て親も驚けば子も親を見て亦驚いた。兩人共互に暴風雨で死んで了つて居ると思つて居たからだ。——それに今此な所で會ふとは全然夢のやうだ。兩人は互に手を取り合つて悦んだ。

するとミランダが、

『まあ何と立派な方でせう、此な方などの住んで在らつしやる所は屹度好い所に違ひありません。』

ネーブルス王は自分の息子にも劣らぬ標致の良い品格のある、この娘を見て、

『この娘は一體誰だね、先に私達を離間させ、今仲直りさせた女神に違ひない。』

するとファードナンドは自分がミランダを見た時に思つたと同じやうにも父様が間違つてゐるのを見て微笑みながら、

『いえ、矢張人間です、そして私この方と神様の御引合せて、縁組を結ぶことになりました。實はお父様が最う此の世に御在なされないことと思ひ、その御許を願ひませんでした。この方はプロスペロの娘御です、ミランダ公の息女です。……私以前からその名を聽いて居りましたが、ただ一度も會つたことがありませんでした。然るに私この方の御蔭で生命を拾ひ、今またこの娘を貰ふことが出来るやうになりました。ですからこの方は私の第二の親でいます。』

すると王も、

『では私もこの娘の親に當る親が娘に詫を言ふのも變だな。』

『なに御詫などは御無用、斯う芽出度く納まつたのが何よりです。最う過去の事は一切忘れて何にも考へますまい。』

とプロスペロが言つて、彼は弟を抱いてその罪を許してやり、尙これも神の攝理で娘がネーブルス女王になるために、ミランの小さい領地から逐出さるゝに至つたのだ。何故なら、一同が此の淋しい小島に逢はなかつたなら、皇子が娘を愛するやうにならなかつたからと話した。プロスペロが弟を慰める積りで言つた。此の言葉を聽いて弟のアントニオは非常に心に羞ぢて、種々と懺悔して泣いた。傍で此の有様を見て居た老人のゴンザローも大に悦びて、若夫婦の上に神の祝福の豊かならんことを祈つた。

そこで、プロスペロは船が港に待つて居ること、水夫等が早用意してること、自分と娘とは翌朝一緒に出立することを話して、

『穢るしい洞穴ですが、一寸何か食物を差上げませう、それに夜には私が此の島へ來た以來の昔話でも餘興に致しませう。』
と言つて、またカリバンを呼んで食事の用意をさせた。

プロスペロは此の小島を去る前に、アリエルの職を解いてやることを話すと、アリエルは、

『それは有難うムいます。けれどもどうか順風の助けによつて、船が安全に彼方へ着くまで御供をさせて頂き、その上で私の職を解いて頂きませう。然う願へれば私の悦びは此の上もありません。』
と願つた。

そしてアリエルは、

『蜜あさる蜂と群立ちて、

花より花に吸ひ行かん。

くりんさくらの花床に

鼻をきいて假寝せん。

夏は飛びかふ蝙蝠の

背に打のりて、いと樂し。

うれし今我が住むところ
花は小枝にたわみ咲く。』

さて、プロスペロは最う魔法は一切止めようと思ひ、魔法の書物や杖を
地面に深くに埋めて了つた。斯うしてプロスペロは自分の敵に打克ち、
弟とネーブルス王とも中直りしたので、たゞ後に残るのは、早く故郷へ
歸つて娘とフアーディナンドとの祝言を擧げる事になつた。
ネーブルス王も亦プロスペロに故郷へ歸り次第、兩人の祝言を擧げる
といつて、一同は今アリエルの助けて、無事の航海を終へ、故郷へ戻るこ
とになつて居る。

御意の儘物語

一

佛蘭西がまだ封建時代で、數多くの諸侯が各地に割據してゐた頃であ
る。その中の一人が現在血を分けた弟に、その領地を奪はれて、他處へ追
放らるゝに至つた。

この公爵が、その領地を追放られた時、忠義な家來が五六人公に従つて
アーデンの森へ遁れた。この家來といふのは、その主人のために地所も、
扶持も悉皆失つたのだが、それを何とも思はないで、たゞ憐れな主人に
仕へて居た。——彼等は斯うして森の中に住んでゐるのであるが、こん
な住家に慣れると、今迄の氣苦勞の多い生涯よりは、結句此の方が香氣

であると思つた。

彼等は古い英國のロビンフードの如く、楽しい其日を送つてゐた。殊に宮方からは數多くの貴公子が毎日絶間なく訪ねて呉れるので、まるで黄金時代の人々のやうに、ごく氣樂な年月を過してゐた。夏には森の繁つてる木陰に寝て、野鹿の面白く遊びに来るのを眺めてゐた。公爵は自分達の食料のためとはいへ、この可憐らしい野鹿を殺すには忍びないと思ふほど、彼等を可愛がつてゐた。

冬の寒い時には公爵も過ぎしかたの事など考へて、氣の沈むこともあるけれど、彼は自分で自分を勵まし、これではならぬと氣を取直して、『この様に身體を刺すやうな冷い風こそ實は自分の好い相談相手ではないか、風は私に媚び諛ふのではない眞に自分の今の境遇をよくあらはして居る。よしんば風が鋭い牙を研ぎすまして自分の身を噛むことがあつても、その牙は決して不深切な、思知らずなどの牙ほど鋭くは

ない。大方誰でも人は災厄や不遇などを嫌つて、兎角安逸がして見たいけれど、それには種々味ふべき事が含まれてゐる例へていへば、藥に用ふ貴い寶玉も、毒のある忌ましい蝦蟆から取るといふてはないか。』と考へた。

こんな風で、忍耐づよい公爵は、自分の見るもの、聞くもの、何に限らず、其の身に比較べて種々の教訓をとつてゐた。それで現在社會から離れて、此の寂しい森の中に住んでゐるけれど、何かにつけて、直ぐ木々の間からは辯舌流るゝ小川からは書物、轉がつて居る礫からは説教といふ風に、萬物からも多くの教訓を學んでゐた。

この追放られた公爵に、たゞ一人の娘ロザリンドといふがあつた。今の暴逆い領首フレデリックが、其の兄公爵を追放つた時、自分の娘シリアの遊相手として、御殿の中にロザリンドを止めて置いた。この兩人は極仲がよく、親達が恨を構へ、恐ろしい仲違ひをして居る事など、一向に

頓著せずにもたけれどシリアの方では自分のお父様が無法な事を
して、ロザリンドの父を追放つたことを如何にも濟まない事と思つて、
若しロザリンドが何か考へ事をして心を沈ませて居る時は一生
懸命になつて、その心を開いて慰め力づけることを務めて居た。
ある日シリアが、ロザリンドに平常の如く優しい素振で、

『ロザリンドさん、後生ですからも些とはさくして下さいな。』
と慰めて居た時、父公爵からの使が来て、唯今相撲が始まるから、御覽に
なるなら、御殿の前の廣庭へ来るやうにと告げた。

これを聞いてシリアはこれで一つロザリンドの心を引立て、やら
うと思ひ、

『では参りませう。』

と言つて、ロザリンドと共に出懸けることにした。

一體この相撲は當時御殿に行はれて、貴顯紳士の前でやられる、楽しい

遊戯の一つであつた。この相撲見物にシリアとロザリンドは出懸け
た。これは兩人共なか／＼好きであつたからだ。

さていよいよ始まりになると、軀幹の大きい筋肉の極逞しい男とが
出て来たが、此の男は久しい間練習に練習を重ね、屢々敵手を蹴殺した事
のある勇士であつた。けれどその相手の男といふのは、極若々しい、技術
も、まだ碌々心得て居らぬ青二才であつたから、見物人は必ずこの男が
殺されることになるだらうと心配しながら見てゐた。

公爵はシリアとロザリンドが這入つて来ると、
『お前達はこの相撲を見に来たのか……こんな勝負は見る價值がな
い、あの若いのが負けるに定つて居る、寧ろ始めから中止めさせる方が
まだ可い、お前達あの男のところへ行つて、止めるやうに話して来ない
か。』

斯う言はれて、兩人もまた然うだと思つた。そこで兩人は其の男のとこ

ろへ出懸け、シリアが、

『こんな亂暴な勝負は中止めなさる方がよくはありませんか。』
と止めた。するとロザリンドも傍から、

『こんな勝負は中止めなさいまし。』

と身に沁みるやうに其の男へ話した。けれど其の男は何うしても勝負を中止めようと言はない。却つてこんな優しい貴婦人の前で一つ自分の腕前を顯はしてやらうと思つた。それで其の男はシリアや、ロザリンドの優しい勧めを承知ず心ではこんな事を考へつゞけた。

『私貴嬢方の御勧めだからさかなければならない筈ですが、この事ばかりは許して頂きたい何うしても仰せに従ふことは出来ません……そんなお言葉を頂いたゞけて私にとつては此の上ない本望です私が若し負けたところで、誰一人可哀さうと思つて呉れる人のないこの身の上、殺されたところで、そんな惜しい生命ではありません。』

けれど斯う若者が承知かなければ承知かない程、兩人は何うにかして中止めさせたいものだと思つた。しかし何うしてもその甲斐はなかつた。

二

そこで相撲ははじまつた。シリアはこの若者が害をうけないやうにと祈つてゐた。ロザリンドはシリアにもまして心を悩ましてゐた。この男がたよる友達の無い今の境遇、却つて死を欲する其の事情などが、ロザリンドの今の状態と似通つてゐる。それでロザリンドは一層同情に堪へなかつたのだ。それで彼女は勝負中一方ならず心配して、まるで何か危険が自分の身に加はつて来るかのやうに覺えた。若し他人からお前はあの男を戀してるのだと言はれても、否然うでないと打消す

ことの出来ない位であつた。

若者の方では知りもしない令嬢方から、こんな深切を示されて、非常に勇氣が出た。それで暫らく兩人は勝負を争つたが、到頭若い弱々しい男の方が勝を占めて、敵を打まかし、最う身動きも出来ない程に負して了つた。

フレデリック公爵も、この意外の勝負に、全く驚いて、遽に若者の勇氣、手練を感じて、早速其の男を我家に抱へようと考へ、其の姓名と家柄とを尋ねた。

すると若者は直ぐ、
『私はオーランドと申して、サーローランド、デ、ボイの末子でいます。』と答へた。

オーランドの父なるサー、ローランド、デ、ボイといふのは、五六年前此の世を去つたものだが、此の男は追放られた公爵のまたとない忠臣で

あつた。それでフレデリックは其の名と其の家柄とを聞くと、今迄の好意は忽ち不快の念に變つて了つた。彼は直ぐ氣色を更へて其の場を去つたけれど、去りながらも公爵は残り惜しさうに、

『若しオーランドが誰か他の人の倅であつて呉れたらばよかつたらうに。』

と言ひくして居た。

これに引きかへ、ロザリンドは今勝負に勝つた若者は、自分の父に仕へた昔の家來の子息であることを聞き、何だか非常に力強くなり、大悦びしてシリアに、

『私の父さんはサー、ローランド、デ、ボイを大層可愛がつて在らつしやいました。私だつて若し此の若者が其の子息だと初めつから知つてゐたもんなら涙を流してだつて、こんな冒険はやめさせましたのに。』と言つた。

そこで兩人はつか／＼と若者の身邊へ寄り男が公爵の不興を買つて悄然してゐるのを見て、深切な言葉を懸けて其の心を引立てゝやつた。ロザリンドは此の若者が自分の父の舊臣と知つて、一層やさしい言葉を掛けた。そして彼女は自分の頸から鎖を脱り、

『さあこれをお懸けなさい、私がつと幸福な身分ならば、何なりと最と善いものを上げる理だけれど、何うも仕方がない』と言つた。

其の後ロザリンドとシーリアとたゞ兩人になると、ロザリンドは頻と若者のことを話し出した。これを知りてシーリアは心の中に、ロザリンドさんは屹度あの男に戀したのだなと思つた。

『そんなに忽然に、よく思ひ込みなさいましたのね。』と尋ねると、ロザリンドは、

『でもお父様があの方のお父様を可愛がつて居ましたもの。』

『だつて、それがあの人を戀したといふ理由にはなりません。……若

しそんな理由からいへば、私のお父様があの方を憎んだなら、私も矢張あの方を憎まねばならぬといふことになります。……けれど私には其な事は出来ません。』

とシーリアは言つた、フレデリック公爵はサー、ローランド、デ、ボイの子を見てから、不圖自分がアーデンの森へ追放つた老公爵の事を思ひ出した。老公爵が多くの貴族社會から持囃されて居ること、また人々がロザリンドを讃めて、眞實に氣毒な方だなど同情するのを思ひ出すと、遽にロザリンドが憎いやうな氣がして來た。

そこでフレデリック公爵は眼を怒らせながら兩人の室へ這入つて行つた。其の時兩人はなほオランダのことを話し合つて居た。

これを聞いて公爵は尙かつとして、ロザリンドに『お前は直ぐ、此の御殿を出て、お父様の後を追うて行くが可い。』

と言つた。これを聴くと娘のシリアが急に悲しがり、いろ／＼と父に詫を入れたけれど、父は何うしても承知がなかつた。

『何を言ふ……ロザリンドを此處に置いてやつたのも實はお前のためだつたのだ……』

と言つて娘に恩をさせた。するとシリアは、

『でも私ロザリンドさんを置いて下さいと御願ひした譯ではありません。其の时分には私はほんの子供で、ロザリンドさんが何な方か知りませんでした。』
 『けれど長い間一緒に二人が起臥をし、學問もし、遊戯もしたので、今では私眞實に一緒にゐないと、最う生きてゐるかひがないやうな氣がします。』

これを聴いて父は、

『馬鹿を言つては不可ん、ロザリンドは餘り賢し過ぎるわ……何でも柔和で、口數を言はない娘だと評判だ、けれどあれでなかく我慢強い』

娘だ……ロザリンドが居ればこそお前が評判にならないではないか、若し彼女が居ないとなればだん／＼お前が評判者になる……それをお前が引きとめるなんて、それこそ馬鹿をいふものだ。それに一度口に出したことを今更止められると思ふか、止めても駄目だ、駄目だ、最う言ふな／＼。』

斯う父から言はれると、シリアは口を噤んで了つた。此の上願つても父の平常の氣性ではとても許して呉れないと思つた。それから二人はアーデンの森へ逃げようと決心し、夜御殿をぬけ出て、アーデンに追放られて居る老公爵を尋ねて行つた。

三

まだ二人は出發しない中に、シリアは此な事を考へた。若し私共二人が立派な美しい衣類を着たまゝで旅行しようものなら、それこそ何

な危険い目に會ふか知れない。それで田舎娘の装をして行く事にしよう。斯う思つてそれをロザリンドに話すると、ロザリンドはまたロザリンドで、兩人が女の風をして行くより一人男の風をして行つたら、尙更よくはないかと言ふので、成程それが可からうと確定つた。そしてロザリンドが丈が高いので、直ぐ田舎の若衆装に衣類をかへ、シリアは田舎娘と化け、兩人を兄妹と見立て、兄をカニミード、妹をアリーナと命じた。

斯う様子を更へると、兩人は路用には金貨の外に寶石などを携へ、長い旅へと出懸けた。

ロザリンド「今からはガニミードと言はなくてはならぬは、男装をすると、それはよく似合つて、立派な逞しい丈夫のやうに見えた。シリアはこの長旅を一緒に行かうといふ深切者であるから、ロザリンドも其の誠心に感じて、本當のガニミードといつても差支へのない武

骨な物堅い兄となり濟まして、シリアの氣を引立て、つゝ歩行いた。

終に兩人はアーデンの森にいたが、今迄の如く都合の可い旅舎も飲食店も一つとして無いので、食物は食はずが、又休息むことも休息まずがちであつた。其の爲め兩人は初めはいろく愉快な話や何かで楽しく歩行いて居たが、其の中に兄のガニミードも流石に閉口して、ひ

「斯う男の装こそしてゐるが女のやうに泣きたくなつた。」

と白状するに至つた。するとアリーナもまた、

「私も最う歩行けなくなりしました。」

と言ふ。これを聽いて男装をしてゐるガニミードは此處が男の務めだ、一つ弱つてる妹を慰めてやらねばならぬと考へ、遽に心を引立て、

「氣を確固しなくては不可ません。最うアーデンの森へ來たのです。」

と言つて妹を勵ました。

併したとへ兩人はアーデンの森へ来たとは言ふもの、何處に老公爵が住んでゐるか判明らないので、中々一時装うた男氣質や強ひて絞ら出した勇氣ではなかく辛抱することが出来なかつた。それで兩人は食物は無し、その上路でも迷うたら何な苦しみをせねばならぬかと中心心配して居たが丁度幸ひそこへ一人の田舎漢がやつて来た。これを見て兩人は遽に勇氣づき、ガニミードが先づ、その男に、

『もし羊飼者さん、私達は御覽の通り疲勞れて、其の上腹が減つて斯うやつて草に臥がつて居るのですが、何うてせう一つ私達を眞實に休息むことの出来る處まで連れて行つて下さいませんか、これは私の妹です。妹は最う一步も歩行けないと言ひますが……一つ御願です御禮は何でも致しませうから。』

すると羊飼ひの其の男は、
『俺はほんの羊飼者の下男だ、何處といつて目的もないが……俺の主

人の賣家へ一つ連れて行かうか有合せてなら何かあるだらうからな。』
それで兩人はその男に従いて行つたが救助かるといふ見込がつくと、
兩人は遽に元氣づいた。

後で兩人は其の男の主人から、その家と飼養つてある羊を買占め、また案内して呉れた男を下男として使ふ事にした。斯うして兩人は清潔した小屋に住み、食物にも困らないやうになつた。それで一安心をして老公爵の住家の在所を探し出した。

兩人は先づ此處で旅の疲れをやすめたが、なかく氣樂なものだからこれは面白いと思ひ、一つ羊飼者の夫婦になつて見たいなどいふ氣もあこした。併し時とするとガニミードは父の舊臣オランダの事を思ひ出し、あの自分が慕つて居る人は此處から遙か離れて居る彼方に居ると考へた。然るにその自分の慕つて居るオランダが思ひがけなくも、此のアーデンの森に来て居るのが知れて驚いた。

四

元來オリランドは、サー、ローランド、デ、ボイの末子である。父が死んだ時にはまだ僅の小兒であつたから、父は長男のオリヴァーを呼んでその養育方や、教育方を頼み、くれぐれもこの子を家名を汚す事のない様な人間に仕立上げてくれと遺言した。けれど長男のオリヴァーはごく下等な男であつたから、死んだ父の遺言を守らうともしないばかりか、學校へさへもオリランドをやらないうて、放棄つておいた。然し元來オリランドはごく性質が善く、高尚い氣象を持つて、父そつくりの男であつたから、別に少しも教育を受けなかつたが、自ら人品が具つて来た處がこれを見た長男のオリヴァーは、弟の人格の卓れて、威嚴あるを嫉ましく思ひ、何うにかして一つ殺して了つてやれと考へた。そこで以前に言つたやうな有名な力士を呼んで、兩人を勝負させ、其の男をして弟を瞬殺

させようとした。

しかしオリヴァーが折角たくらんだ奸惡い計畫も、まんまと外れて、兩人の勝負は弟の勝となつて了つた。これを見ると兄の嫉妬と憎惡は一層加はつて、兄は弟の寝てる所を焼殺して了はうと思つた。處が其の時亡父の忠臣の一人が、それを聞きつけ、それにオリランドが能く父に似て居るので、尙更殺してはならぬと思ひ、直ぐ弟の居る公爵の御殿へ走け付け、オリランドに會ひ、

『まあおなつかしい若様！ 亡きローランドの生き記念！ 何故貴方はそんなに正直で在らつしやるのですか、何故そんなに優しく在らつしやるのですか、…… 貴方があの力士にお勝ちなされた事が早お家に知れて居て……』

と話して来たが、其の老人のいふことが一向オリランドの腑に落ちない。それで老人は一部始終をかくくと話して、其處を早く遁れるやう

にと告げた其上其の老人のアダムはオランダが金を少しも持つて居ないのを知つて、自分の貯へ五百クラウンを旅用にと與つた。

「私五百クラウンだけ持つて居ります、これは貴方のお父様から頂いたのを節約して貯へておいたのでもいます。老後何かに不自由だらうと思つて貯へたのですが、何宜敷うムいます、悉皆貴方に差上げます。それに何卒私を御召使ひ下さいますやうに御願ひ致します。なに年こそ齡つてをりますますが、まだ働くことは出来ましますとも。」

斯う言はれてオランダは、
「それは何うも有難い昔から忠實にお前は仕へて呉れたが眞實に奉公人の手本だ。さあこれから一緒に此處を立退くとしよう……此の金を使ひ果たさぬ中に何かにあつて、二人困らぬやうに暮したい。」
そこで兩人は何處を當ともなく旅に出懸けた。そして兩人は何時かアデンの森に到着いたが、これもガニミードとアリーナとが出會つた。

やうな空腹い辛苦を嘗めた。

兩人は何處か住家を探さうと諸方を徘徊ついで歩いたが、飢餓と疲労で根が盡きて了つた。アダムはオランダに向つて、

「最う腹が空いて、此の先一步も歩けません、死ぬより他に途がありません。」

といつて、地面に腰を下して了つた。

これを見たオランダは、老人を非常氣の毒に思ひ、それを抱いて木陰に伴れて行き、

「まあ氣を確りするが可い、なに疲れを休めれば直ぐ直るさ。」
と奨励した。

そして自分は其處中食物を探しに歩いたが、不圖老公爵が家來達と晝飯を食べて居る處に出會はした。

この會食を見ると、オランダは力任せに其の食物を奪つてやらうと

の考へを起し、

『まあ食べるのを待つが可い、其の食物は此方へ悉皆よこして了へ。』
と嗚鳴つた。これを聞くと老公爵は不思議に思ひ、

『何を無禮なことをするのだ、困苦つてるのか。』

と窘めると、オーランドは自分が今空腹で死ぬばかりになつてる事を話した。

『それなら一緒に坐つて食べるが可い。』

と老公爵に言はれて、オーランドは案外な言葉に驚愕りして了ひ、また今迄の自分の亂暴を心から恥ぢて、老公爵の寛容を請うた。彼は持つてる劍を元の鞘に納めながら尙話をつとけた。

『私は此の森では野蠻人ばかり住んで居ると思つて、こんな始末に及びました。貴方は何なち方が存じませんが昔は何處か由緒ある人で在らしつたんではありませんか……』

すると老公爵は、

『さう私達もこれで相當の身分のあつたものだ。今こそ此な處に住んで居るが、元は都に住んで、教會の鐘も聞き、貴方の饗宴にも預つたことのあるものだ……さあ何なりと欲しいものを食べるが可い。』

『いや實は私の身を思うて私と一緒に附いて來てる一人の老人が、あります。それが疲勞と飢餓で起つことも出來ないでゐます。其の老人が食べない中は私は何うしても頂くことが出來ません。』

『それは不便だ、その老人を早く此處に連れて來るが可い。』

これを知るとオーランドは丁度親鹿が仔鹿を探す如く、走けて行つて老人のマダムを連れて來た。

それを見ると老公爵は、

『さあ早く下して休むが可い。』

老公爵の臣等が頻と食を薦めるので、兩人は心から歡んでそれをたべ、

それで元氣が舊來のやうに恢復して來た。
 食事が濟むと老公爵はオーランドにお前は誰だと尋ねたが、その男が
 敵の忠臣サー、ローランド、デ、ボイの末子である事が分つたので大に喜
 んで再び主従の關係を結んで、共にこのアーデンの森に住むことにな
 った。

五

オーランドが此の森へ來たのはかのガニミードとアリーナが同じく
 此の森へ來て羊飼の小屋を買つた日とそんなに違つてゐなかつた。
 ある日ガニミードとアリーナとは森を逍遙して居ると立木の一本に
 ロザリンドといふ名と戀歌とが彫り附けて在るのを見て不思議に思
 つた。何うして此なことがあるのかしらんと疑ひ怪んで居る中にある

日思ひがけなくもオーランドに出會つた。ガニミードはよく似た顔だ
 と思つて尙見入ると其の頸の周圍に以前自分がやつた鎖を掛けて居
 る。それでガニミードはこれはオーランドに違ひないことを知つた。
 併しオーランドは今出會うた羊飼ガニミードがあつたやさしい愛情に
 富んでゐる女で、そしていたく自分の情をひきつけさせ、その後いつも
 忘れる事が出來ないで木々の上に其の名を刻みつけ、其の美しい容姿
 を讚美せしめたロザリンドだとは夢にも思はなかつた。けれどオーラ
 ンドは若い綺麗な品のある羊飼の姿が氣に入つて、其の男と言葉を交
 はしたが、それが自分の慕つて居るロザリンドのやうだと次第に氣付
 き出した。

ガニミードの方でもまたそれと知つて、無遠慮にやゝ滑稽を交へて、オ
 ーランドに、

「此の頃ある戀人が度々此の森へ來て、若木にロザリンドなど彫み付

け、また荆棘に戀歌を結付けて頻とロザリンドといふ女をほめて居るが私が其の戀人に會つたらば直ぐ其の戀を遂げさせるやうな相談相手になつてやりたいが。」

と言つて其の男の氣を引いて見た。

するとオリランドは今の戀人こそ私であると白状し、何でも其の戀を遂げるやうな名案はあるまいかとガニミードに訊いた。するとガニミードはたゞ、

「貴方が私と私の妹のアリーナが住んで居る小屋に來れば可いのです。」

と言つた。斯う言つてガニミードはまた言葉を改めて、

「私がロザリンドの眞似を致さう、それで貴方が私をロザリンドだと思つて私を戀するやうな眞似をすれば可い。私は私で戀人に對するやうな風をする。これが貴方の病を醫す一番よい方法です。」

と言つた。オリランドは心でそんな事ではなか／＼むつかしいと考へたが、兎も角その男の言葉通り、毎日ガニミードの小屋へ通つて羊飼がニミードをロザリンドと呼び丁度若い男がその戀人に對するやうな事をして居た。

これで兎も角も兩人は冗談とは言ひながら、其の心の憂を晴らしあつて居た。お人善のアリーナも亦兩人が戀事の眞似をしてるのを見て自分の氣を紛らして居た。

ある日ガニミードは父の老公爵に會つた時種々の話からその系圖を問れたが、老公爵と同じだとガニミードが答へると、公爵は思はず失笑して、小綺麗にこそして居るが、お前は身分の賤しい羊飼ではないか、それが貴族の血統を承け繼いでるとは聞いて呆れるといはぬばかりの顔をした。

オリランドは毎日ガニミードを見舞に行つて居たが、ある日今日これ

からガニミードを訪ねようと出懸ける途中で、一人の男が地上に眠つて居るのを見たよく見るとその男の頸には蛇が巻き付いて居る。然し蛇はオリランドが近づくと藪の中へ逃げて行つて了つた。尙近づいて行くと牝獅子がその男の目覚めるのを待つて居る様だ。

六

オリランドはこれを見た時、その男を危険から救ひ出してやらうと思ひ、その眠つて居る男の方へ近寄つた。よく見るとその男といふのは、嘗て自分を苛酷く取扱ひ、また自分を焼き殺さうと計んだ兄のオリヴァーではないか。それでオリランドは一層のこと兄を餓えて居るこの獅子の餌食にしてやらうかとの念も起つたけれど、また兄弟の情合がむらくと起つて、そんな事をしてはならぬと考へ己の佩劍を引抜き、そ

の獅子を殺して兄を危険から救ひ出してやつた。けれどこの時オリランドも獅子の爪で片腕を引き裂たかれ。

オリランドが獅子と奮闘して居る時、オリヴァーは不圖眼を覺ますと會て自分が酷遇かつた弟が、生命を賭けてまで獅子と戦つて、自分を救はうとして居るのを見て、彼はむらくと自分の過去の罪を追想し、愧かしくなつて懺悔の涙を流して弟の前に以前の罪を詫びた。兄がかくも後悔したのをオリランドも非常に悦び、その時から兩人は眞實の友情を交はすやうになつた。

實はオリヴァーは弟が去つてからも、なほ弟が憎くつてく仕方がなく、この森まで遙々と弟を殺すつもりでやつて來たのであつた。オリランドは片腕の傷を受けたので、ガニミードの處へ行くことが出來ず、兄に自分に代つてその出來事を兩人に話して呉れと言傳てた。兄はそこでガニミードとアリーナの居る處へ行き、オリランドが自分を

助けて呉れたこと、自分が嘗て弟を酷く扱つたことを話して、その罪を懺悔した。この話をきいて居たアリーナは心に實に感心な人だと思ふと共に心からその男が戀しくなり出した。ところがオリヴァーの方でもこの美しい女がいたく自分に同情を寄せて呉れるのを知つて、これまたその女が慕はしくなつて來た。斯うして兩人は直ぐこれから戀仲となつた。

オリヴァーはその用事が済むと弟の許へ歸つたが歸ると直ぐ彼方での有様と自分がアリーナを戀したこと、また彼方でも自分を戀して居るやうだと話し、自分は是非あの女と結婚したいものだと言つた。これを知つたオリランドは、

『それは承知致しました。では明日御結婚をなさいます。私公爵とその友達とをその場へ招待致しませう。さあ早く行つてその女を納得させて置いてなさい。幸ひその女の兄ガニミードが此處に來る筈ですから、

後はその女一人になります。』

と話した。それでオリヴァーは直ぐアリーナを訪ねて行つた。すると彼方からガニミードがオリランドを訪ねて來たので、兩人はオリヴァーとアリーナとの中に戀が出來たことを噂をした。その時オリランドは兄にアリーナと結婚するやうに勧めたことを話し、自分もロザリンドと同時に結婚することが出來たらば何なに嬉しからうかと告げた。これをきいてガニミードは、それは善いと賞讃して、

『貴方が若し本當に、ロザリンドを戀しく思ひ、その事を公言する事を憚らないなら私が明朝ロザリンドの正體を現はして御覽に入れませう。ロザリンドは勿論貴方との結婚を喜びます。』と話した。

オリランドはガニミードの言葉を半信半疑の中にきいて居たが、ガニミードは尙、

『貴方が一番宜い衣服を着て、公爵を始め、他の人を婚禮にお招き

なさい。』

さてその翌日になつてオリヴァーとオーランドは招待した人の中に
出たが、一人の花嫁がまだ来ないので、誰も彼も不審をうつて居た。老公
爵は公爵で羊飼が自分の娘を連れ立つて来るといふ不思議な報知を
きいて、それは信實かとオーランドに尋ねた、けれどオーランドはよく
返事することが出来なかつた。

丁度そこへガニミードが現はれて、公爵に、

『私が若しも御姫様をお伴れ申しましたら、オーランドとの婚禮を御
許しなさいますか。』

と訊ねた。すると老公爵は、

『よろしい許してやる。』

これをきいてガニミードはまたオーランドに、

『貴方は私がお姫様をお伴れ申したら屹度も姫様と御婚禮をなさい

ますか。』

『え、確と婚禮を致します。』

とオーランドは直ぐ答へた。

そこでガニミードはアリーナと一緒にその席を退いたが、ガニミード
は今迄の男の装を脱ぎ棄て、眞實のロザリンドになつて了ひ、アリー
ナはアリーナで田舎娘の服を脱棄て、昔のシリアとなつた。そして兩
人は美しい装をして公衆の面前に現はれた。

これを見た父公爵の悦びは一通りでない。すぐ改めてその結婚をまた
許し、終にオーランドはロザリンドと、オリヴァーはシリアと同時に
芽出度祝言をした。

一同が斯な風で満足して、木陰で祝宴を開いて居る時、思ひがけない吉
報が老公爵のもとへ来た。それは昔の公爵の領地が自分の手に戻るや
うになつたといふ報告であつた。

兄の領地を奪つたフレデリック公爵は娘のシリアが逃出したので大變に怒りまた追放した老公爵に多くの人が同情を寄せてるのを見て嫉ましく思ひ數多の軍勢をつれて、アーデンの森を指して來兄を始め忠臣諸共殺して了つてやらうと考へたが、天の攝理が降りて來て、その計畫を思ひ止まることゝなつた。フレデリック公爵は軍勢をつれてこの森の入口まで來るとある徳高い隱者に出遭ひ、その人の話で翻然とその罪を悔ゆるやうになつた。その悔改めの第一歩として公爵は使を兄の許へ送り、今まで永らく奪つて居た其領地を返上することにした。この悦ばしい吉報が丁度二嬢の結婚の當日についたので森の中の喜悅は尙一層加はつて共に共に老公爵家の萬歳を祝した。

そのため老公爵は今迄辛苦の裡に尙忠義を怠らなかつた家來共に厚く酬いてやる時が來たが、さて家來の方ではそんな事よりも自分達の仰ぐ主君が舊御殿に芽出度歸るやうになつたのを、此の上なく悦んだ。

冬物語

一

昔シ、リー王レオンテイズと容色の美しい皇后ハイマイオニとは、至極仲睦まじく暮してゐた。王は皇后を非常に愛するので、何一つ不足がない幸福なものであつた。たゞ王は時々昔の學校馴みなるポヘミヤ王ポリキシニースを未だに皇后に紹介するの折のないのを残念がつて居た。

この二人の王はごく幼少い時分から一緒に教育を受けて仲よかつたが、雙方共その父が崩じたので、それゝその國を繼いでそれきり會ふ機會がなかつたのだ。無論書面の贈答などは絶えずあつて、舊來からの

交誼はつゞけて居た。

レオンティズがポリキシニースを屢々招くのでポリキシニースも終に思ひ立つて、自分の本國を離れてはる／＼シ、リ、リへやつて來た。兩人は久し振りに會ふことが出來たので、レオンティズの喜悅はまた非常で直ぐ皇后を呼んで昔馴染の友達を紹介した。兩人は會ふと直ぐ昔話が湧いて出て、小學校時代の事や、その時分の惡遊戯のことなど、皇后の前で辯りながら笑ひ興じた。

ポリキシニースは永い間樂しくシ、リ、リ國へ滞在してゐたが、また自分の國の事も氣にかゝるので、思はつきないけれど、暇乞して旅の用意に取りかゝらうとする。するとレオンティズと皇后のハーマイオニには尙暫らく滞在して行くやうにと熱心に勧めた。

それでポリキシニースはその勧めを斷りかねて、尙五六週間滞在することに定めた。——けれど斯うしてポリキシニースが滞在つたことが後

で取りかへしのつかない事になつた。

それはシ、リ、リ王のレオンティズが、嫉妬の心をむらく／＼と起したとだ。彼とて初めはポリキシニースの實直な性質と、主義の上に立つ堅い人であること、また自分の皇后は淑徳ある高尚い氣質の者だと能く吞込んでゐたが、兩人がいかにも馴れ／＼しくするのを見ると、王は疑ひの眼を以て兩人を眺め、今まで愛情に富んだ、友誼に厚い人であつたのに、遽に野蠻人のやうな怪物となつて了つた。王はそこで自分の近臣カミローといふものを呼んで、心の中を打あけポリキシニースを毒害しようとして計畫んだ。

近臣カミローは極人の善い性質で、王の嫉妬は全く根もない事だとよく熟知つて居つたから、毒害などをする所てなく、内密その由をポリキシニースに知らせて、共々シ、リ、リの領内を逃げる事に相談をきめた。そこでポリキシニースはカミローの援助で安全に自分の領内ポヘミ

ヤに逃げ歸つた。この時からカミローはポリキシニースの王宮に住んでゐて王の二なき友達として、また氣に入り家來として仕へてゐた。こんな風でポリキシニースが逃げたことがレオンタイズの耳に這入ると、王はいよく嫉妬心を起して直ぐ皇后ハーマイオニの室へ這入つた。その時マミラスといふ幼児が母様の心を慰めようと何か面白い話をして居たが、王は室に這入るやいなや何も言はないで、幼児を母から引きはなして、皇后は直ぐ牢屋の中へ押し込めて了つた。マミラスは年齢も行かぬ幼児であつたけれど、心がやさしく、母思ひであつたから、母がこんな侮辱をうけて、牢屋へなど入れられたのを非常に氣にして、それからといふものは碌に飯も食はず、夜も眠りもしないで、物案じばかりして居た。それがため身體が漸次瘦せてこんな調子では死んで了ふやうなことになるはしないかと、心配される位であつた。

二

王は皇后を牢屋に送ると、直ぐ近臣クリオミニースとダイオンといふ兩人を呼寄せ、これからアポロの神殿に行つて、皇后が實際自分に不貞操であつたか神託をうけて來いと命じた。

處がその頃皇后は妊娠であつたから、牢屋へ送られると程なく産氣づいて一人の娘の子を生み落した。所夫の嫉妬で此な悲惨な有様となつた皇后は、一人の娘が生れるとやゝ慰藉を得た。

けれどその赤兒が可哀さうで堪らず。

『こんなに小さいくせに牢屋に入れられて居るなんて眞實にお前は可哀い娘です、ね、けれどもお前ばかりでない私だつて何も罪もないのに矢張斯うして此處に居るんだから。』

と言つて自ら慰藉めて居た。

ハイマイオニには精神の高尙い深切な友人近臣アンティゴナスの妻ポリーナといふのが居た。ポリーナはこの頃から皇后が産をなさつたこのことを聞いて、その閉ぢ込められて居る牢屋へと行つて見た。

そしてハイマイオニの侍女エミリアに會つて、

「エミリアさん何卒かその赤兒を一寸で可いから私にお貸し下さいませんか、そして皇后様に御願ひして下さい、こんな可愛いお子さまをお父陛下に御目にかけてたら、いくらお父陛下でも御人情を柔げ遊ばすに違ひございませんから。」

と頼んだ。これをきいて侍女のエミリアは、

「それは誠に善い思召です。一つ唯今皇后様に御伺ひ致して見ませう。皇后様も今日誰か來て赤兒を王様にお任せ申して呉れる者はないかと仰つてございしました。」

「それは尙好都合でございます、きつと皇后様の御爲めにもなませうから、一つ是非お取次をお願ひ致します。」

「ほんとに貴女は御深切で、私神様に貴女の上に祝福のあるやうに祈ります。」

といつて侍女は皇后ハイマイオニの所へ行つてポリーナの願の筋を申上げた。元から皇后は誰か來てこの赤兒を父陛下に御覽に入れて呉れる者があれば可いがと待つて居た。矢先だから、大變に喜んで、その願ひを許して赤兒を早速ポリーナに渡した。

そこでポリーナはその赤兒を抱いて王様の所へ連れて行つた。夫アンティゴナスはそれが反つて王様の怒に觸れるやうな事があつては大變と頻と妻を止めたけれども、ポリーナは一向夫の言葉には順着しなかつた。そして直ぐ王様の所へ行つて赤兒を御覽に入れ、皇后様のために辨解をし、王様の不人情を責めたけれども、ポリーナが爲た事は反つ

て王様の不興を買つて、王は夫アンティゴナスを呼出し、妻を伴れて引ささがらせた。ポリーナは斯うして王の御前を退いたが、若し後に赤兒を殘して來たらば王もそれを見るにつけ、皇后を憐むの心を起すだらうと思つて、わざと赤兒を王の下へ置いて來た。

けれどこのポリーナの考は違つて居て、王はポリーナが出ると直ぐ無慈悲にもアンティゴスをして赤兒を海邊に伴れ行き、荒寥しい磯に棄て、殺すやうにと命じた。アンティゴスは妻のポリーナとは違つて、王の命令に柔順に従つて、赤兒を直ぐ船に載せて遠い濱邊へ棄て、來ようと思つて、船を乗り出した。

これより先、レオンティズはアポロの神託を受けさせる積りて、近臣クリオミニーズとダイオンを遣はしたが、まだ兩人の歸つて來ない中に、自分一人定めて、ハイマイオニの罪を定め、皇后がまだ産後と赤兒を失くした悲しみとでもがいて居るのを、無理やりに百官の前へ出して

裁判をさせた。一天萬乗の皇后ハイマイオニは憐れな囚人として、臣下の前で裁判を受ける事になつた。丁度その時使にやつてあつた兩人の臣下がアポロの神託を受けて歸つて來たが、直ぐ王の前に出で封のしであるまゝ、神託を王に渡した。

三

王はその神託を臣下に下して早速開封するやうにと命じた。それで臣下の一人がそれを開けて讀むと、神託は次の如くであつた。

「ハイマイオニに罪なく、ポリキシニースにも亦罪なし。カミローは忠臣なれど、たゞレオンティズ王こそ嫉妬深きものなれ。若し王にして先きに失ひし者を見出すことなくば、その後繼は終に絶えなん。」

この神託を聞いて、王は反つて怒り出し、こんな神託は信仰するに足り

ないとて、皇后の裁判をなほ進ませた。併し王が斯んな無慈悲な事をやつて居る時、一人の男が這入つて來たが、皇子が母上の生命を取られるための裁判のことを聞いて、悲しみの餘り突然お死去になつたとの知らせてあつた。

皇后ハトマイオニは自分の可愛い子供が母の不幸を悲んで死んだときいて、老も亦適に氣絶して了つた。こんな出來事のために王は心を刺れて不憫なる皇后の病氣を癒すやうにポリーナを遣はした。程なくポリーナは歸つて來たが、ハトマイオニ皇后もまたお死去になつて了つたと王に告げた。

レオンテイズ王は皇后の死んだのを聞くと、今迄自分が皇后に對して餘り無慈悲であつたことを思出した。それと共にあの神託は虚偽なきもので、皇后には少しも罪のないことを知つた。それは皇子マキラスが亡くなると共に、自分には後繼がなくなつたことが確かだからだ。そ

れて王はあの海邊に棄てた娘を誰か伴れて來るなら天下を與へても惜しくないと思ふ位であつた。王は斯んな風で懺悔の念に燃え悲みの中に永の年月を送つた。

處が以前アンテイゴナスが小さい姫様を載せて海へ出た船は丁度暴風雨に吹きつけられてボヘミヤの海岸即ち無罪の王ポリキニースの領内へ着いた。アンテイゴナスは此の海邊に赤兒を棄て、歸りかけた。

アンテイゴナスはシ、リ、リに歸つて赤兒を棄てた場所を王に復命する筈であつたが、アンテイゴナスが丁度歸航の船に乗らうとする時、一匹の熊が森から顯はれて彼を寸断寸断に裂いて殺して了つた。

海岸に棄てられた赤兒は流石王様の姫様だけあつて、身には美しい寶玉をつけ立派な衣服を纏つて居た。そして上衣にバイテイタといふ名前が縫付けてあつたが、これは生れは貴いけれど、運命が拙いといふ意

味てつけたのだ。

この赤兒は或羊飼に拾ひ上げられたが、この男は至つて慈悲心に富んで居たから棄兒を家に伴れ歸つて妻と一緒に大事に育てたけれど赤兒の身につけてある寶玉の事が人に知れては大變と思ひ、それを隠すためにこの地を去つて他所へ行き、そこで數多の羊を飼つて大層な富有者となつた。

このバーディタは其の羊飼の家でだん／＼成長つて可愛らしい少女となつた固より羊飼の娘に相應しい丈の教育しか受けなかつたが貴い母の高尙い性質を承け繼いでゐたから、それは見上げるほどの立派な者となつて來た。

ボヘミヤ王ポリキシニースにはフロリゼルといふ一人の王子があつた。この王子が羊飼の住家のほとりて、或る日遊獵をして居つたが美しい娘のバーディタを見て、その高尙い舉動に、ついその娘を戀するやう

になつた。そこで王子は自分の名をドリクルスと更へて、普通の紳士の風をして絶えず羊飼の家を訪ね出した。

四

斯ういふやうに皇子が度々宮殿を留守にするので、ポリキシニース王は不信に思つてよく王子の事を探らせると、全く王子が羊飼の娘に戀して居るのが判つた。それでポリキシニースはシ、リー王レオンテイズが憤つた時、自分を救つて呉れた忠臣カミローを召び、バーディタの養父なる羊飼の家に自分と一緒に行くやうに命令けた。行つて見ると丁度羊飼の家は羊毛を剪つた祝の最中だ。この祝の時は誰でも歓迎する習慣になつて居るから、二人も直ぐその仲間入りをした。彼方にも此方にも若い男女が舞つたり跳ねたりして居た。

此なにも一同は大騒ぎをして居るのに、フロリゼルとバーディタはたゞ
 兩人片隅の方に坐つて、何か頻々と會話をしながら笑ひこけて居る。

ポリキシニス王は自分の子にさへ父様だと見付られない位巧に身
 装をして、兩人が話して居る會話を聞きに傍へ近寄つた。聞くとその娘バ
 ーディタが我が子フロリゼルに話して居る言葉づかひが、いかにも優し
 いので、一方ならず驚いて了つた。それで王はカミローにいふには、

『自分は今までこんな綺麗な田舎娘を見たことがない。それに話すこ
 とも爲ることもなかく立派で、羊飼の娘とは思へない位だ。』

『ほんとに左様でムいます。まああんな仲間では勿論女王といふ格で
 せうと存じます。』

そこで王は老年の羊飼に、

『お前の處の娘御と話をして居るのはえらい男振のいゝ若衆ではない
 か。』

と話しかけた。すると羊飼も

『あの若衆は名をドリクルスといつて、私の娘に惚れ込んで居るので
 す。戀といふ奴は何方が何方ともいへませんが、この娘を手に入れる男
 は幸福でさあ。』

と鼻うごめかして、暗にバーディタが持つて居る寶玉のことをほのめか
 した。彼は羊を飼つた餘りの寶玉を娘の嫁入支度のために貯へておい
 たのであつた。

斯うきくとポリキシニスは、その子に、

『何うだ若衆お前の心は一體何處にあるのだね、何か別なものにお前
 は心をうばはれて居るやうだが。』

若衆はそんな事をいつて居るのは、自分の父だとは少しも知らないかあ、
 『なにこの女です……この女の望んで居る者は私の心の中にあるん
 です。』

と言つて娘のバーデイタに、

『ねバーデイタ、この叔父様に一つ證人になつて貰はうてはないか。』
若者は斯ういつて、傍に居る老人を結婚を約束する證人になつて貰はうとした。その時王は自分の正體を現はして、

『そんな事をされてたまるものか。』

と言つたが、これは我子が何處の馬の骨とも分らぬ羊飼の娘と結婚しようとするのを怒つたのだ。それで彼は若し皇子がそんな娘と一緒にならうなどいへば、直ぐ羊飼の親子を殺して了ふと嚇した。斯う言つて王は兩人を残してその場を去り、カミローに皇子を伴れ歸るやうに命付けた。

王が去つてからバーデイタは皇子に向つて、

『何な目に遇はうと私は恐がることはありません、王様の宮殿を照らす太陽は、矢張私の小屋だつて照らすてはありませんか。』

兩人の様子を先程から見居たカミローはバーデイタの心意氣のいかにも優れて居るのを見て、若者が心を引かれるに至つたのも無理ならぬ事と思ひ、一つ兩人に力を添へてやりたいと考へた。それに兼て自分が思つてる事を實行して見たいと考へた。

カミローはシ、リー王レオンテイズがその罪を懺悔したことを知つて、自分は今ポヘミヤに来てポリキシニース王の寵愛をうけて居るが、舊來の君主と我故郷を見たいものだと思ひ出した。それでフロリゼルとバーデイタとに自分と一緒にシ、リーの宮殿に来ることを勧め、若し兩人が来るならレオンテイズ王に保護を願ひ、その中に自分が間に入つてポリキシニース王から結婚の許可を得るやうに取り計らつてやらうと兩人に話した。

兩人は悦んでこれに同意したから、カミローは兩人と羊飼も一緒に伴れてシ、リーへと旅立つた。その時羊飼は娘バーデイタの寶玉と襤褸

と上衣に縫ひつけてあつた紙片とを持つて出懸けた。航海も無事で四人は程よくレオンティズの宮殿へ到着いた。レオンティズは皇后を亡くなし、また子供の事を思つて悲しんで居る時だから、直ぐカミローを招いて、手厚く饗應した。一緒に來たフロリセルとも種々の物語をして居たがその皇子がこれは自分の皇妃であるといつて、バーデイタを紹介した時、王はこの皇妃は我が皇后によく似てるなと思つた。さう思ふと昔のことがいろ／＼胸に浮んで來て、若し自分が酷いことをしなかつたら、自分にもこんな愛らしい者があるわけだがと考へずにはゐられなかつた。

斯んな事を思ひながら王はまたフロリセルに、『私は今では最う君のお父様とは交際を絶つて居るが、今になつて見ると一生の中最う一度會つて見たい氣がする。』と話した。

五

傍に控へて居た羊飼は王が熱心に娘を注視するので、嘗にきいた王が娘を捨てたことを思ひ出し、また自分がこのバーデイタを見付けた時や、捨てられて居た場所、その身につけて居た寶玉のことから、このバーデイタはシ、リー王の娘ではあるまいかと考へた。それで羊飼が娘を見出した時のことやら、アンティゴナスが熊に殺された當時のことなど話し出すと、それをフロリセルもバーデイタもカミローもまた忠義なポリーナも傍で聞いてゐた。暫らくして羊飼は立派な上衣を取出したが、それを見てポリーナはこれは以前、ハイマイオニがその兒を包んでゐた衣服だと思つた。すると羊飼は今度は寶玉を差出したが、それはハイマイオニがバーデイタの

頸に結びつけたあれだなど知つた。すると羊飼はまた一つの紙片を差出したが、夫れは自分の夫アンティゴナスの自筆であるのを知つた。これにて羊飼の娘バーデイタがレオンテイズの娘であることは些とも疑ふ餘地がない。けれどポリーナは此の時自分の死んだ所夫の事を思ひ出して何ともいへない悲しさを感じた。王はまた王てその娘が自分の娘にちがひないと知ると、大變によるこんだが、その娘の母のことを考へてたまらなくなり、

『若しも前の母様がををつたならば、』
と心の中で叫んだ。

ポリーナはこの悦ばしい痛ましい出来事の中に、つか／＼と進み出てレオンテイズに、

『王様私この頃以太利の有名な彫刻家ジュリオ、ロマノの製つた肖像を手に入れましたが、それがまた皇后様にそっくりです。王様が

私の家に被入つて、それを御覽になれば成程と思召すて下さいませう。』
すると王は自分の皇后の似顔が見たいと直ぐ一同引きつれてポリーナの家へ行つた。ポリーナは有名な彫刻を覆うてある幕を明けたが、成程それがハーマイオニと寸分違はぬ。王は之を見るとまた新しい悲しみに打たれて、暫らく物一つ言ふことが出来なかつた。

すると之を見たポリーナは、
『王様餘程御感に入りましたと見えますな。眞實に皇后様そっくりては、ムいませんか。』

その時王も、

『自分が初戀をした時分、皇后はこんな立派な立姿であつたが、併しポリーナ、その時のハーマイオニはこの様には年をとつてゐなかつた。』
『其處でムいます、彫刻家の豪いところは、假に皇后様が今生きて在らしつたならば、こんな年恰好でございます。けれども最う宜敷いでせうか』

「幕を引くことに致しませう。」
すると王は、

「まあ暫らく幕を引いて呉れるな。カミローお前にはこの肖像が呼吸をしてる様には見えないか。やれ目が少し動き出したやうだ。」

「最う幕を引させよう。そんなに恍惚として終にはこの像が實際生きて居るなどと御考へ遊ばすところありますから。」

「そんな事なら二十年も考へさせて貰はうか。氣のせいかな呼吸が此處まで通つて来るやうだ。何と巧な彫刻ではないか。この像に俺が一つ接吻してやるから笑つては不可ないぞ。」

「そんな事をなさつては不可ません。唇を染めてある繪具がまだ乾いておませんから、その油で陛下の御唇を汚すといけません。まあ、幕を引させよう。」

「幕を引くのは二十年ばかりも待つて呉れ。」

王とポリーナがこんな對話をして居る時、パーティタは始終跪いて比類まれなる母の像に見とれて居たが、

「私も二十年ばかり此處に斯うして母様を眺めて居たい。」
といつた。すると例のポリーナは、

「御二方とも最少し氣を落ちつけて頂させよう。最う幕を引させます。貴方がたが最と驚愕りなされることを御目に懸けますから御用心なさいませ。私この像を眞實に動かして御目に懸かせよう。この像を踏臺から卸して陛下の御手を握らせて御覧に入れます。然しそんな事したらそれは魔物の力を借りたのだと思召すか知れませんが、決してそんな事はありませぬ。」

王はポリーナの此の言葉を聞くと驚いたが、

「それは有難いお前のする通り黙つて見て居よう。動かせる？ 話させる？」

そこでポリーナは兼て用意してあつたある音楽を奏だすと、像が踏臺からそろ／＼下りて來たので、誰一人として驚かないものはなかつた。やがてその像は兩腕をレオンティズの頸へ投げかけた。何をするか一同が茫然とられて見て居ると、像は細い聲ではあるが夫と今度めぐり會つた娘の上に神の祝福の豊かならんことを祈つた。——けれどこの像が王の頸に取りつき、夫と子供の祝福を祈つたのも別に不思議はない。その像といふのは實際ハーマイオニであつたからだ。活きて居る皇后それ自身であつたからだ。

六

これから先きポリーナは自分の仕へて居る皇后様の生命を救ふ手段として、王は伴つてハーマイオニは以前に亡くなつて了つたと話した。

そして皇后は長らく深切なポリーナの家に一緒に暮らして居たが、今日といふ今日が日まで何も王には知らせずに置いたのだ。

斯く死んだと思つた皇后は生きかへる失つたと思つた娘は發見つたので、長い間もがき悲しんで居たレオンティズ王は飛び立つばかりに悦んで、神の自分に下す祝福の過分なのを知つた位であつた。

かうなると、彼方からも此方からも歡喜の挨拶が起つた。王も皇后も娘を可愛がつて呉れたフロリゼルや、今迄養育て、呉れた羊飼に幾度となく禮を述べた。カミローとポリーナは自分達の忠義によつて、此な芽目度い結末を見るに至つたことを非常に悦んだ。

こんな歡びで一同がが／＼言つて居るとき、其處へポヘミヤ王ポリキシニースが這入つて來た。ポリキシニースはフロリゼルとカミローが逃げた後、カミローが一度シリへ戻りたいと言つて居たことを考へ出し、兩人は確と彼地へ行つたに違ひないとその後を追うてシ、

リーへやつて来たのであつた。ポリキシニースはこの喜悅の團樂の中に這入つて、レオンテイズが昔からの嫉妬の罪を宥してやり舊來の温かい友情を以て相愛することを誓つた。そして勿論息子がバーデイタと結婚することも賛成した。斯うして誰も彼も一同幸福に此の世を暮らすことが出来た。

通俗文庫
第八編

シエークスピア物語 終

シエークスピア物語

定價金貳拾錢

明治四十二年七月一日印刷
明治四十二年七月十五日發行

著作者 百 嶋 操

發行者 山 縣 文 夫

東京府下北豐島郡巢鴨町
大字上駒込十九番地

印刷者 藤 本 兼 吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町
一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町
一丁目十二番地

不許複製

發行所

東京巢鴨郵便區上駒込山縣邸内
電話 下谷四百三十八番

内外出版協會

(振替貯金口座番號三五五)

ウイダ原著 日高柿軒譯 榎田利雄畫 (定價金貳拾五錢 郵稅四錢)

フランダーズの犬

僕は先づ、此の書ほど、僕に感動を興へたものは、近頃めまり無いといふことを告白する。原著者は、本名をルイス・デ・ラ・レミイと云ひ、假號をウイダと云つた蘭秀文學者で、生時、その名聲は世に噴々たるものであつた。この書の趣意は世の、弱きものを、愛しきもの、蔑けらるゝものに對して、満腔の同情を表せんとしたので、殊に、忠犬が辱弱き主人を慕ひつゝ、榮華を餘所にして、死地に就く健氣さか描けたるあたり、余と樂と樂とに、身も世もあらぬ主人が、食にも飽き、衣をも得らるべき機会を得ながら、知らず識らず、涙の溢れたところ、少くも、二十五六頁四十六七頁八十六七頁。どうか、何處の家庭でも、親でも子でも、雇人でも、一度は是非、讀んで欲しい。動物に對する愛護の念が、湧き起されるばかりでは、ない。實に世に處して行く上について、無くてならない、大切な、同情といふものが、購者の成功を祝する。終りに、この書の譯文が、また甚だ巧妙であるといふことを書き添へて、(新佛敎、高島米峰氏) 本書は數月前伊太利に窮死し、僅かに其の一忠婢と數頭の犬猫とによりて哀悼の誠を致されたる遺傳不遇の間秀作家ウイダ(本名ルイス・デ・ラ・レミイ)女史が一代の傑作にして、現下歐米の各新聞雜誌は、筆を揃へて之を激賞し、世界最良圖書百卷の一に數ふべきを云ふべきものあり。實に世の貧しき者に對して、死地を脱する作者の同情熱誠は、滾々として紙上に溢れ、殊に忠犬が辱弱き主人を慕ひ、自ら安樂を捨て、死地に就くあたりは、武に五六の少年少女をして讀ましたるに、よく一人の泣かざるものあることなし。譯文また流麗暢達。動物愛護の情を養はしむる上に、多大の貢獻あるべきを信じて疑はず。是れひとり少年少女の健全なる家庭讀本として推薦すべきのみならず、また贈物用として甚だ妙なる可し。(萬朝報)

元版 東京巢鴨區山縣口金貯管振 内郵山井染區便郵鴨巢京東 番五十五百三第座口金貯管振 會協版出外内

内外出版協會(東京巢鴨上駒込山縣邸内)發兌書目

(明治四十二年六月改正)

一。修養書類

博士スマイルス原著 文學士 孫若月保拾譯述
博士スマイルス原著 文學士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文學士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文學士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文學士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文學士 竹村修譯述

職分論 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
品性論 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
自助論 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
勤儉論 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
勞働論 定價金五拾錢 郵稅六錢

博士ジョーダン原著 文學士 石原謙譯述
内外出版協會譯纂
内外出版協會譯纂
内外出版協會譯纂
内外出版協會譯纂
内外出版協會譯纂
内外出版協會譯纂

克己論 定價金六拾錢 郵稅(小包)八錢
青年訓 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
人生訓 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
處世訓 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
社會訓 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
家庭訓 定價金二圓五拾錢 郵稅(小包)八錢
日本自助論 定價金壹圓 郵稅(小包)八錢

吉川潤二 原著
人生の行路
定價金二圓三拾錢
郵稅(小包)八錢

吉川潤二 原著
人生の實務
定價金六拾錢
郵稅六錢

大原英次 原著
人生の福音
定價金五拾錢
郵稅四錢

文學士竹村 修譯述
人格に如何に養成すべきか
定價金五拾五錢
郵稅四錢

山縣健三 原著
天眞の生涯
定價金五拾錢
郵稅四錢

河面仙四 原著
有用の生涯
定價金四拾錢
郵稅四錢

吉川潤二 原著
向上的生涯
定價金六拾錢
郵稅六錢

文學士竹村 修譯述
青春の佳期
定價金八拾錢
郵稅(小包)八錢

前田定之介 原著
如何に慰安を求め
定價金五拾錢
郵稅四錢

内外出版協會 譯纂
修養全書
定價金二圓三拾錢
郵稅(小包)八錢

博士 賢造 原著
理想の紳士
定價金貳拾五錢
郵稅二錢

水島靜處 原著
人道と天道
定價金五拾錢
郵稅四錢

文學士藤原秀峰 譯述
樂天主義
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

内外出版協會 譯述
廿世紀の武士道
定價金五拾錢
郵稅四錢

博士 本ノクス 原著
わが青年
定價金五拾錢
郵稅四錢

文學士村上瀧洲 譯述
社會の要する少年
定價金五拾五錢
郵稅四錢

ロースヴェルト 原著
ロースヴェルト集
定價金四拾錢
郵稅四錢

若宮卯之助 譯
座右銘
定價金四拾錢
郵稅四錢

文學士 中村昶 山譯
日常行為の標準
定價金貳拾錢
郵稅二錢

中里介山 原著
克己制慾の實例
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

水島靜處 譯
日常生活の勇士
定價金五拾五錢
郵稅四錢

スポン 大學校長 原著
若宮卯之助 譯述
廿世紀の青年告
定價金五拾錢
郵稅四錢

井口丑二 著
二宮報徳教要領及其處世法
定價金五拾五錢
郵稅四錢

井口丑二 著
二宮報徳物語
定價金貳拾錢
郵稅四錢

占部百太郎 著
青年の修養
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

宮崎右夫 著
貧の朋友
定價金拾五錢
郵稅二錢

文學士若月保治 譯述
立志の動機
定價金五拾錢
郵稅六錢

好本 譯述
教育上の常識
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

本田増次 譯述
婦人の修養
定價金五拾錢
郵稅六錢

加藤眠柳 著
女子立志編
定價金五拾五錢
郵稅四錢

内外出版協會 譯纂
人生問題叢書
定價金九拾錢
郵稅(小包)八錢

二。成功書類

博士マーデン原著
文士竹村修譯述
實業に就する青年
定價金壹圓
郵税(小包)八錢

コッパア原著
文士竹村修譯述
商業の模範的經營
定價金六拾錢
郵税六錢

博士マーデン原著
内外出版協會譯述
成功の基礎
定價金參拾錢
郵税四錢

博士クラフツ原著
内外出版協會譯述
眞正の成功者
定價金五拾錢
郵税六錢

博士マーデン原著
文士竹村修譯述
成功論
定價金壹圓
郵税(小包)八錢

アルダーソン原著
文士生田弘古譯述
成功の福音
定價金參拾錢
郵税四錢

ハヤタ一原著
經理本村秋村譯述
實業訓
定價金四拾錢
郵税四錢

三。傳記書類

松本越編著
三世傳 **基**
定價金壹圓
郵税(小包)八錢

大屋徳城編著
三世傳 **釋**
定價金壹圓
郵税(小包)八錢

四野玉峯編著
三世傳 **孔**
定價金八拾錢
郵税(小包)八錢

博士ヘール原著
波多野鳥峰譯述
子
定價金八拾錢
郵税(小包)八錢

白館にルーズヴェルトの一週日
於けるヘレン・クラウ原著
文士皆川正禮譯述
生涯
定價金五拾錢
郵税六錢

チヨート原著
山縣悦三郎譯述
人物
定價金貳拾五錢
郵税四錢

松村巖著
及**其**事業
定價金貳拾五錢
郵税不

岩崎彌太郎
定價金壹拾五錢
郵税不

新公論社編纂
現代名流自傳
定價金參拾錢
郵税四錢

渡邊修二郎編著
佐倉**木内惣五郎**實錄
定價金貳拾五錢
郵税四錢

阪井久長校著
明治畸人傳
定價金貳拾五錢
郵税不

松村巖著
近藤勇
定價金貳拾五錢
郵税不

四。偉人研究 言行錄

時上賢造編著
第一 **リンコン** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

中里介山編著
第二 **トルストイ** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

中里介山編著
第三 **カーフキールド** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

中里介山編著
第四 **フランクリン** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

時上賢造編著
第五 **クワッドストン** 言行錄
定價金貳拾五錢
郵税四錢

中里介山編著
第六 **二宮尊徳** 言行錄
定價金貳拾五錢
郵税四錢

加藤信正編著
第七 **ローズヴェルト** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

百島操編著
第八 **ワシントン** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

渡邊修二郎編著
第九 **山鹿素行** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

中里介山編著
第十 **中江藤樹** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

秋山悟庵編著
第十一 **貝原益軒** 言行錄
定價金參拾錢
郵税四錢

松本越編著 第十ルイテル言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二那編著 第十大石良雄言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著 第十聖德太子言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	五十嵐越那編著 第十吉田松陰言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二那編著 第十渡邊華山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	本田無外編著 第十熊澤蕃山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二那編著 第十新井白石言行錄 定價金四拾錢 郵稅四錢	文學士藤吉喜一編著 第十ナボレオン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
--------------------------------------	----------------------------------------	----------------------------------------	----------------------------------------	----------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------	-------------------------------------------

松本越編著 第十ネルソン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	室田有編著 第十ウエリントン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	大屋徳城編著 第十日蓮上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	田中豊松編著 第十ベスタロツチ言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	百島操編著 第十ゴウルドン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	姉崎準平編著 第十リヴィンクストン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	横不二夫編著 第十伊藤仁齋言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	本田無外編著 第十道元禪師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
--------------------------------------	----------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------------	---------------------------------------	-------------------------------------------	----------------------------------------	---------------------------------------

河面仙四那編著 第八クロムウエル言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	四島玉峯編著 第九諸葛孔明言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松原至文編著 第十親鸞聖人言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	大屋徳城編著 第一弘法大師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二那編著 第二徳川光圀言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	廣瀬勘次那編著 第三フレール言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著 第四林子平言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	村田厚川編著 第五佐久間象山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
------------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------	----------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------------------

北島竹之助編著 第六司馬溫公言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	本田無外編著 第七法然上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松原至文編著 第八西郷隆盛言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	廣瀬勘次那編著 第九ガリバルチ言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松本越編著 第十マホメット言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	九島敬編著 第一本居宣長言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著 第二上杉鷹山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	杉原三省編著 第三高野長英言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢
-----------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------	-----------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------

勝水環泉編著	第四編 大鹽平八郎言行錄	定價金參拾錢
大塚徳城編著	第五編 傳教大師言行錄	定價金參拾錢
田中豐松編著	第六編 シーザー言行錄	定價金參拾錢
佐久間原編著	第七編 シエークスピア言行錄	定價金參拾錢
渡邊芳雄編著	第八編 ラスキン言行錄	定價金參拾錢
武安衛編著	第九編 孟子言行錄	定價金參拾錢
吉川潤二郎編著	第十編 ビスマルク言行錄	定價金參拾錢
丸島敬編著	第十一編 平田篤胤言行錄	定價金參拾錢
田中豐松編著	第十二編 エチソン言行錄	定價金參拾錢
本無外編著	第十三編 白河樂翁言行錄	定價金參拾錢

高橋立吉編著	第四編 福澤諭吉言行錄	定價金貳拾五錢
永代靜雄編著	第五編 新島襄言行錄	定價金參拾錢
五。家庭書類		
博士フアラ原著 海老澤亮譯述	家庭三	定價金壹圓
シエルドン原著 文學士吉川秀雄譯述	家庭に於ける職分	定價金五拾錢
堺枯川著	家庭の新風味	定價金壹圓
堺枯川著	家庭の夜話	定價金壹圓
文學士 竹村修原著 テグネ原著 内外出版協會譯述	家庭講話	定價金五拾錢
文學士 竹村修原著 テグネ原著 内外出版協會譯述	理想の母	定價金貳拾五錢

マンテカツア原著 文學士皆川正誠譯述	良人の選定	定價金參拾五錢
スウエル女史原著 木田増次郎譯述	黒馬物語	定價金五拾錢
羽仁もと子著	家庭計簿	定價金四拾錢
羽仁もと子著	主婦日記	定價金參拾五錢
文學士皆川正誠譯述	母の道	定價金貳拾錢
加藤眠柳譯述	英國士道物語	定價金參拾五錢
四洞たみの譯編 偉人に及婦人の感化 ほせる	日本女鑑	定價金六拾錢
稲田源光編	日本女鑑	定價金四拾錢

千河岸櫻所著	日本武士氣質	定價金四拾五錢
羽仁もと子著	家庭小話	定價金貳拾五錢
文學士皆川正誠譯述	如何して生活すべき乎	定價金五拾錢
羽仁もと子著	如何に家庭計を整理すべき乎	定價金參拾五錢
羽仁もと子著	家庭問題	定價金參拾五錢
羽仁もと子著	家庭教育の實驗	定價金參拾五錢
醫學博士加藤照磨譯述	育兒法	定價金六拾錢
羽仁もと子著	育兒の楽	定價金拾二錢

博士ウオーカー原著
醫學士 田村貞策譯
衛生美容術
定價金五拾錢
郵稅四錢

伊國カブリオ
ストロ伯原著
西洋獨占ひ
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

幕田鐵造著
幕末百話
定價金四拾錢
郵稅四錢

宮崎三味編
はましの仙郷
定價金貳拾錢
郵稅二錢

波多野烏峰譯
家庭小説
愛の力
定價金貳拾錢
郵稅二錢

少年園編
こども
定價金貳拾錢
郵稅四錢

朝夷孤舟編
ちよのくら
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

威澤金兵衛編
家庭遊戯全書
定價金參拾錢
郵稅四錢

大蔵大臣認許
内外出版協會考案
國旗合せ
定價金貳拾錢
郵稅二錢

内外出版協會考案
家族合せ
定價金拾貳錢
郵稅二錢

内外出版協會考案
室内ベースボール
定價金貳拾錢
郵稅二錢

ウイタガ原著
日高柿軒譯述
フランドーアの犬
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第一編
天路歷程
定價金貳拾錢
郵稅二錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第二編
奴隸トム
定價金貳拾錢
郵稅二錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第三編
聖書物語
定價金貳拾錢
郵稅二錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第四編
赤靴物語
定價金貳拾錢
郵稅二錢

熊谷無漏編
天明俳句集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

大塚甲山編
明治新俳句集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

波邊水巴編
新俳句選
定價金貳拾錢
郵稅二錢

河俣輝峰編
純日本派
名家句集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

高柴象外編
俳句語彙
定價金貳拾錢
郵稅二錢

大塚甲山編
芭蕉俳句全集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

熊谷無漏編
許六俳句集
定價金拾貳錢
郵稅二錢

大塚甲山編
元祿十家俳句集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

永井孤秋編
女流俳家句集
定價金貳拾五錢
郵稅二錢

六。俳諧書類

附川柳狂歌書類

百島冷泉譯編
通俗文庫
第五編
二人巡禮
定價金貳拾錢
郵稅二錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第六編
漂流記
定價金貳拾錢
郵稅四錢

百島冷泉譯編
通俗文庫
第七編
イソップ物語
定價金貳拾錢
郵稅四錢

高濱虛子著
俳句入門
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

寒川鼠骨著
歳事記例句選
定價金五拾錢
郵稅四錢

佐藤紅綠著
俳句小史
定價金四拾錢
郵稅四錢

山田三子編
蕪村俳句全集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

大塚甲山編
一茶俳句全集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

佐藤紅綠編
滑稽俳句集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

文學士 沼波環音編
新俳諧奇調集
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

古 沼波環音 共編
俳句選
定價金參拾錢
郵稅四錢

天 生 目 杜 南 編
古今名流俳句談
定價金參拾錢
郵稅四錢

故 三 宅 嘯 山 選 並 評
俳句評
定價金參拾錢
郵稅四錢

花 岡 百 樹 編
川柳類纂
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

藤 波 樂 齋 編
川柳名句選
定價金貳拾錢
郵稅二錢

藤 波 樂 齋 編
新柳樽
定價金貳拾錢
郵稅二錢

高橋太華編
類題狂歌大全
定價金參拾五錢
郵稅四錢

七。語學書類

東京外國語學校教授
片山寛著
英語の手紙
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

渡邊修二郎著
英語獨案内
定價金四拾錢
郵稅四錢

渡邊修二郎著
英和日用會話
定價金四拾錢
郵稅四錢

渡邊修二郎著
英和書翰文例
定價金參拾五錢
郵稅四錢

渡邊修二郎著
英語作文便覽
定價金五拾錢
郵稅四錢

新編 四澤岩太合著
實用英語會話
定價金參拾錢
郵稅二錢

原作者
英語自修論
定價金貳拾五錢
郵稅四錢

山縣五十雄譯註
英文學研究
定價金壹圓
郵稅(小冊)八錢

高等師範學校教授
木田増次郎註
英文詳解
定價金參拾錢
郵稅二錢

渡邊修二郎著
獨逸語獨案内
定價金五拾錢
郵稅四錢

渡邊修二郎著
獨逸語獨案内
定價金五拾錢
郵稅六錢

渡邊修二郎校補
開國史談(別冊英)
定價金參拾錢
郵稅四錢

HISTORY OF JAPAN
(英文日本近世史略)
定價金五拾錢
郵稅四錢

高等師範學校教授
本田増次郎註
英雄論詳解
定價金貳拾五錢
郵稅二錢

若松賤子譯
セーラクル物語
定價金參拾錢
郵稅四錢

文學士 皆川正壽譯註
希臘勇士譚
定價金參拾錢
郵稅四錢

文學士 小野保三譯註
英米名家詩抄
定價金六拾錢
郵稅不

八。文學書類

ワグネル原著
文學士 皆川正壽譯註
ワグネル物語
定價金六拾錢
郵稅六錢

相馬御風譯述
その前夜
定價金七拾錢
郵稅六錢

中村孤月譯述
暮れゆく海
定價金五拾錢
郵稅六錢

山田美妙譯著
血の涙
定價金參拾錢
郵稅四錢

伊藤銀月著 新東京繁昌記 定價金五拾 郵稅不	平木白星著 日本國歌 定價金參拾 郵稅四	山田美妙著 御婦人殿下 定價金貳拾 郵稅不	吉江孤雁著 ツルゲーネフ 短篇集 定價金五拾 郵稅六	百島冷泉著 トルストイ 短篇集 定價金參拾 郵稅四	河井醉茗著 新集 青海波 定價金五拾 郵稅六	原抱一庵著 十一健兒 定價金貳拾 郵稅不	宮崎三味著 中學文範 定價金五拾 郵稅六
---------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

寒川風骨編著 寫生文 定價金四拾 郵稅六	寒川風骨編著 日記文 定價金四拾 郵稅六	界枯川著 普通文 定價金貳拾五 郵稅二	山田美妙著 一致文例 定價金五拾 郵稅四	五十嵐越耶著 新女子文範 定價金參拾五 郵稅四	九. 中等教科書類 (文部省檢定書)		文學士 佐々政一編 日本文學史要 定價金五拾 郵稅六	文學士 林森太郎編 國語讀本 定價金五拾 郵稅八
-------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	----------------------------------	-----------------------	--	-------------------------------------	-----------------------------------

簡野道明編 初等漢文讀本 定價金八拾 郵稅八	文學士原男六著 簡易西洋史 定價金七拾 郵稅八	ホルトキン原著 文學士 生田弘治譯 一〇. 雜書 定價金八拾 郵稅八	ノックス原著 若宮卯之助譯 讀書の趣味 定價金八拾 郵稅八	東洋文明論 定價金四拾 郵稅四	內外出版協會編纂 袖珍百科全書 定價金壹圓廿 郵稅(小)八	工學士 後藤一郎著 寫真術全書 定價金五拾 郵稅六	松居松葉著 渡邊修二郎著 自轉車全書 定價金參拾 郵稅四
---------------------------------	----------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------	-----------------------	----------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------------

關根默庵著 演劇大全 定價金六拾 郵稅六	渡邊修二郎著 各國分類年表 定價金八拾 郵稅六	大下藤次郎著 水彩畫階梯 定價金參拾 郵稅四	渡邊修二郎著 各人必携 百科節用 定價金貳拾 郵稅二	工學士市川紀元二著 應用骨相學 定價金參拾 郵稅四	北澤寅之助合著 成澤金兵衛合著 新渡米案内 定價金參拾 郵稅四	瀨澤彦太郎著 養蠶新書 定價金參拾 郵稅四	高田新早著 全國學校案内 定價金五拾 郵稅六
-------------------------------	----------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------	---------------------------------

内外出版協會編纂 就業自活案内

定價金參拾錢
郵稅四錢

内外出版協會編纂 女子の新職業

定價金參拾錢
郵稅四錢

内外出版協會案 明治四十二年反省日録

定價金四拾錢
郵稅六錢

米國大統領タフト原著 經國策

定價金四拾錢
郵稅四錢

内外出版協會案 讀書餘録

定價金四拾錢
郵稅六錢

濠江保業譯 心象及び其の實驗

定價金四拾錢
郵稅六錢

長澤則彦著 模範自治村

定價金參拾五錢
郵稅四錢

波多野烏峰譯 ロースウェルトの一週日

定價金參拾五錢
郵稅四錢

註文并に送金について

- 一、御註文は圖書雜誌代價及び郵稅共一切前金の事。御送金は振替貯金、郵便爲替何れにてもよろしく候。代金引換小包郵便は、特別の場合の外、元費多く候に付御断り申上候。
- 一、振替貯金は最も便利なる送金法に候。此送金法に依るときは爲替料、郵稅、書留料等を拂ふの必要なく、而かも不着の恐れ毫も無之候。委細は最寄郵便局にて御尋ね可被成候。
- 一、本會の振替貯金口座番號は「東京第三百五十五番」に候。加入者住所氏名は「東京東鴨町上駒込十九番地」内外出版協會に候。
- 一、郵便爲替にて御送金の際にも、爲替の受取局名を「東京本郷上宮土前」受取人を「内外出版協會」とし「御指定に相成らば、別に書留になさらずとも爲替券を盗み取らるゝ憂ひは無之候。
- 一、郵券代用は紛失の場合に取調への道無之候故成る可く御断り申上候。然かも已むを得ず郵券にて御送附の節は必ず一割増にて御送り被下度候。一割増ならざるものは總て一割増の申受に換算可致候。
- 一、御註文の節は住所氏名等詳細に楷書にて御認め被下度候。傳居の御通知には必ず新着の住所共御明記被下度候。
- 一、返信を要する御照會には葉書又は郵券參錢御封入被下度候。

内外出版協會新刊追加書目(此他數十種目) (下印刷着手中)

内外出版協會譯編

リニコルン一代記 製上 定價金七拾錢 郵稅六錢

廣瀬勲次郎編著

コロンバス 製上 定價金五拾錢 郵稅六錢

宮崎湖處子編

朗吟集 製上 定價金五拾錢 郵稅四錢

宮崎湖處子編

續朗吟集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

佐々木邦譯

法螺男爵物語 定價金貳拾錢 郵稅四錢

佐々木邦譯

いたづら小僧日記 定價金四拾錢 郵稅四錢

井口南臺編著

謡曲お伽嘶 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

大屋徳城編著

俗佛典物語 定價金參拾錢 郵稅各四錢

四脇玉峰編 通俗論語 製上 定價金貳拾錢 郵稅各四錢

佐治實然著 常識道徳 製上 定價金壹圓 郵稅小四八錢

廣瀬又一譯述 實業家寶訓 製上 定價金八拾錢 郵稅(小包)八錢

ウイールヘルム・ハーフ原著 日野廣村譯 幽靈船 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

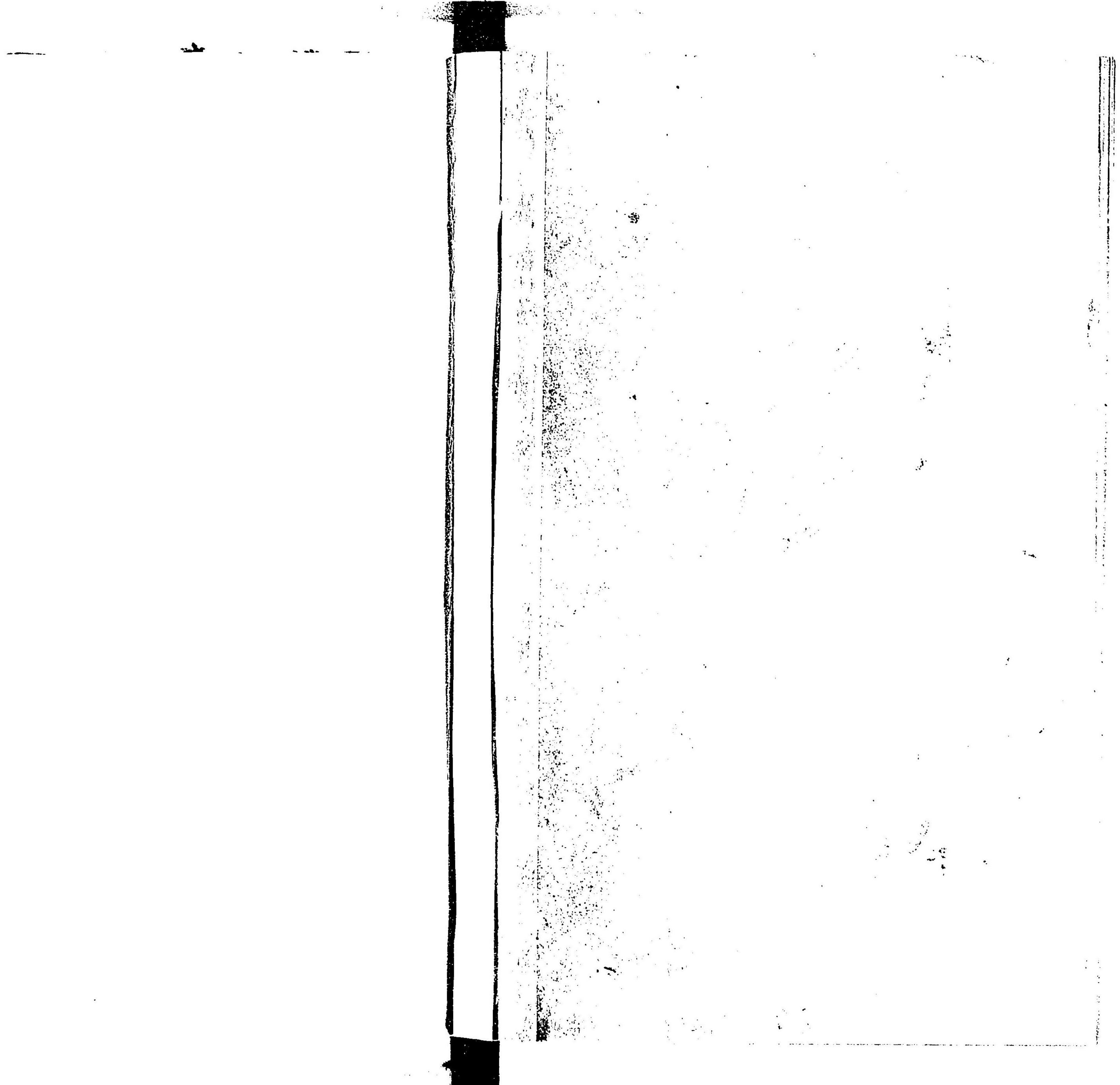
百島操譯 トルストイ小説集 定價金四拾錢 郵稅四錢

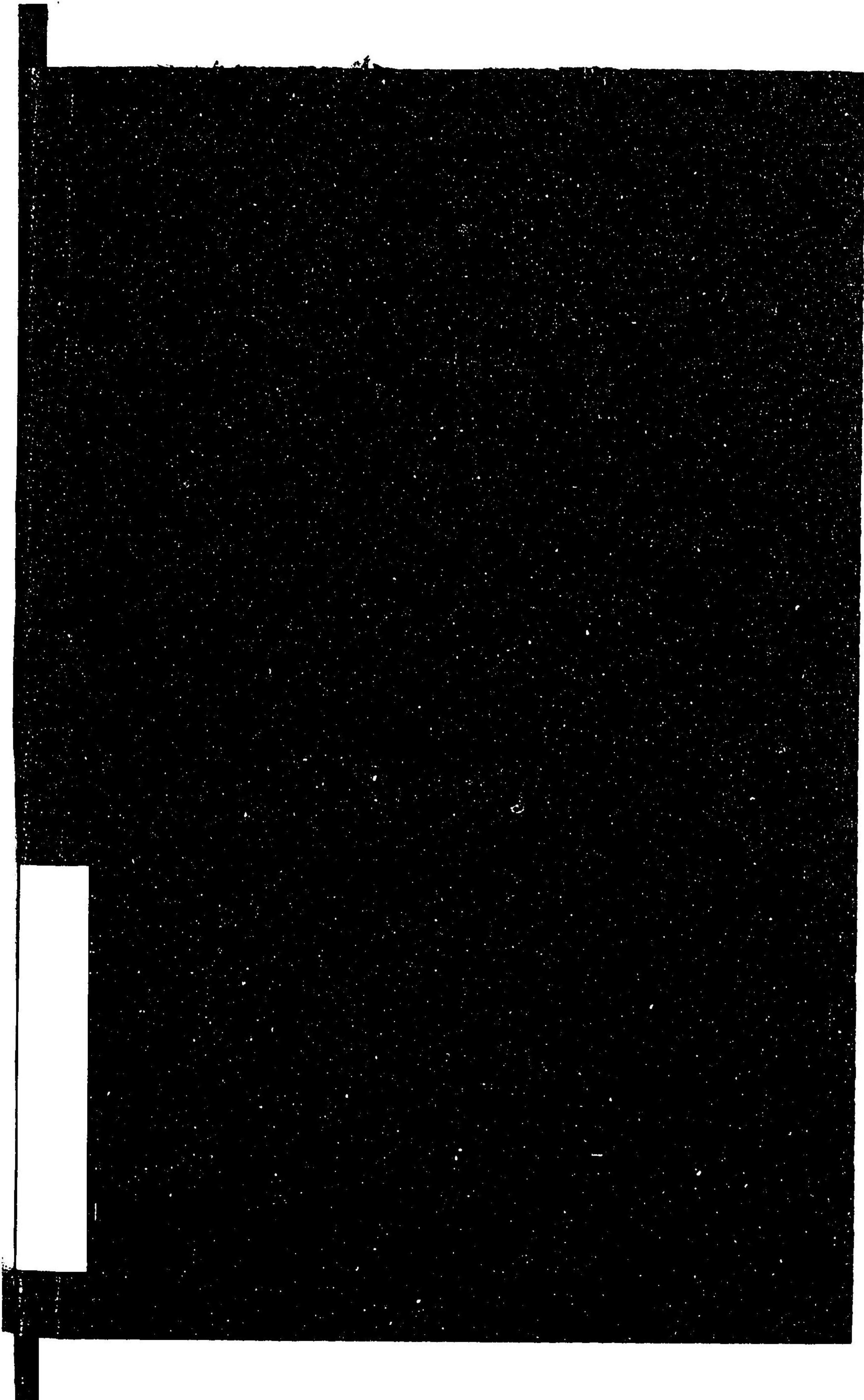
博士シアラ一原著 文學士皆川正藤譯述 淑女の美德 製上 定價金五拾錢 郵稅六錢

森盲天外編著 義農作兵衛 定價金參拾錢 郵稅四錢

カホット原著 榎本恒太郎譯 日常倫理學 製上 定價金壹圓 郵稅(小包)八錢

259
479





特22

176

シェークスピア物語

国立国会図書館

205163-000-8

特22-176

シェークスピア物語

百嶋 操/著

M42

EDV-0177

